

1 1
学 図 小 国 5 1 9

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449662

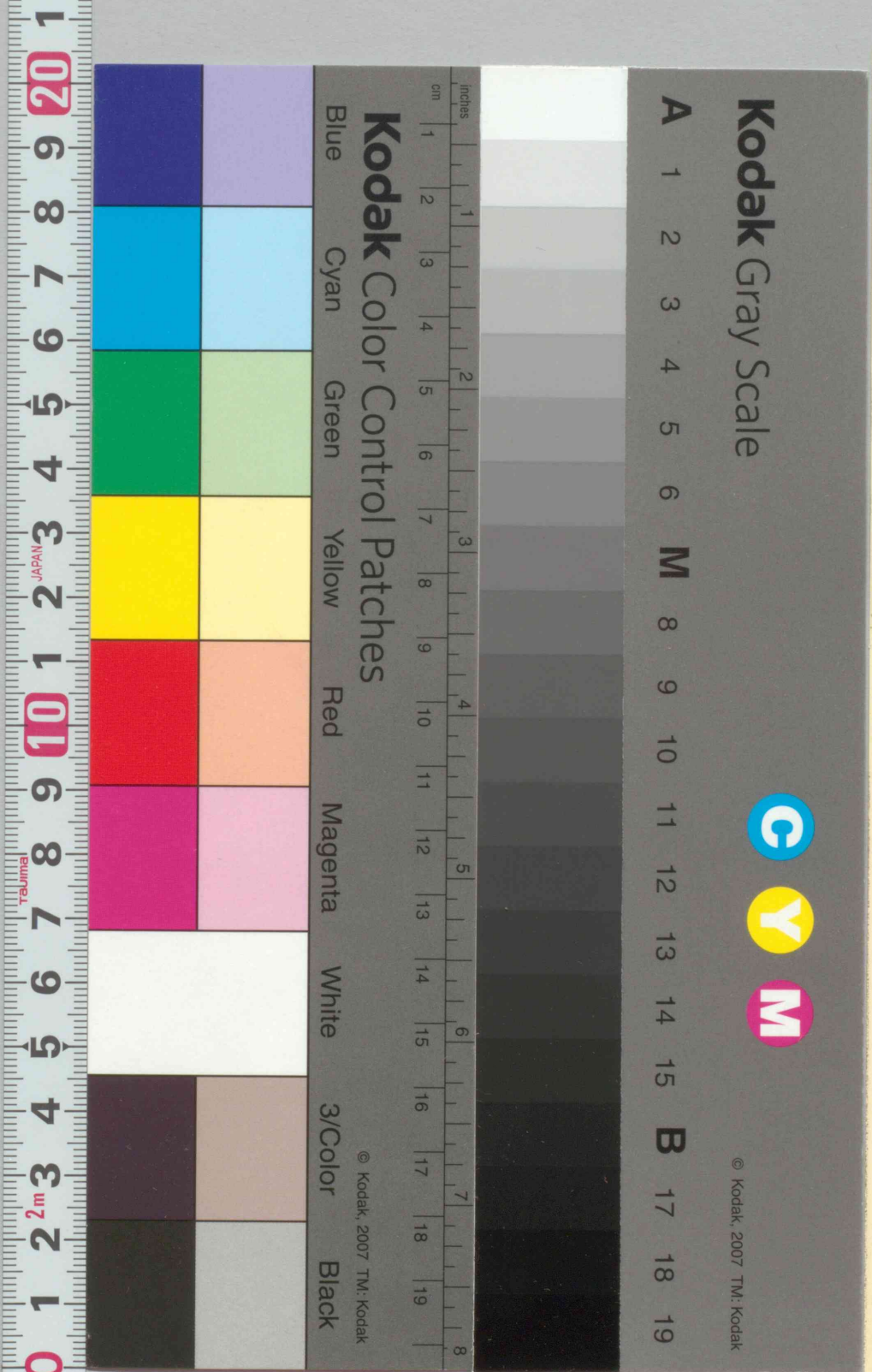
文 部 省 検 定 済 教 科 書
法 財 人 団 体
学 校 図 書 研 究 会 編 修

国 語 五 年 生 上



KC
G16
fe

学 校 図 書 株 式 会 社 発 行



60387

教科書文庫

6
810
34-1950
01304 99662



寄 贈

教科書文庫

6

810

34-1950

0130449662

昭和二十五年 月 日 文部省検定済小学校国語科用

国
語
五
年
生
上



学校図書株式会社

中央図書館

広島大学図書

0130449662



広島大学図書

0130449662



もくろく

(一) 新しい力

一 大地 4

二 春のさきがけ 9

三 新しい力 16

(二) 心と心

一 先生へ 25

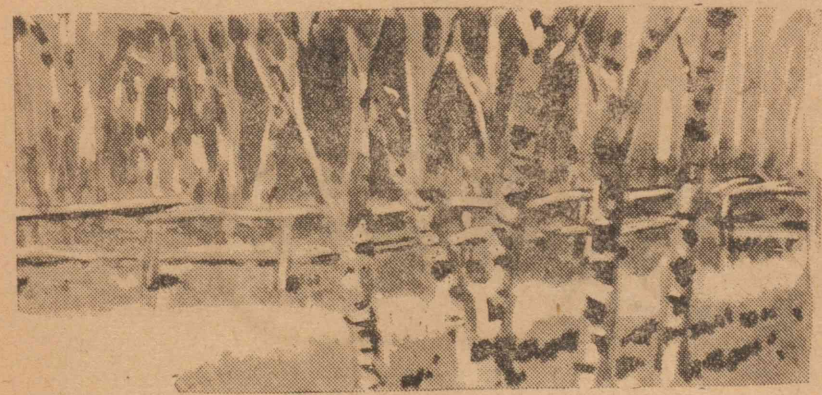
二 わたくしのすむ町 30

三 小さな研究報告 37

四 日記のたより 43

(三) スポーツ

一 ドッジボール大会 51



二 かがやかしい記録 57

(四) 発表会

一 夏休みがすんで 70

二 クラームント号のできるまで 74

三 時 84

四 蚕のまゆ 106

(五) 少年のころ

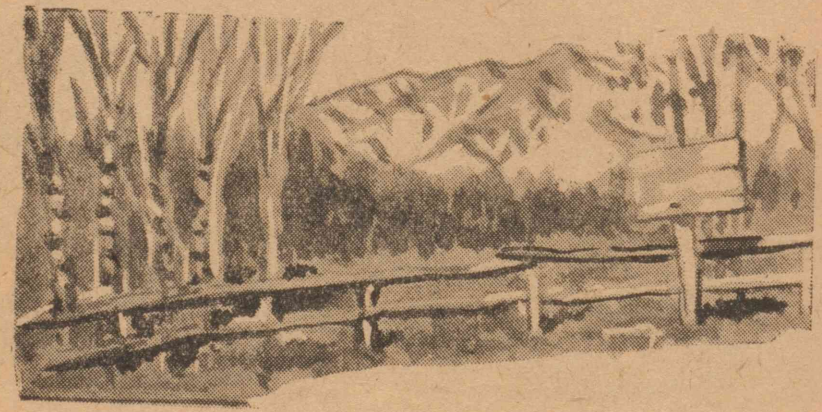
一 小さな画家 113

二 少年ニュートン 128

お仕事の手引 144

新しく出た言葉 153

漢字 159



(一) 新しい力

一 大地

太陽の下に

雨あがり。

しっとりしめり、

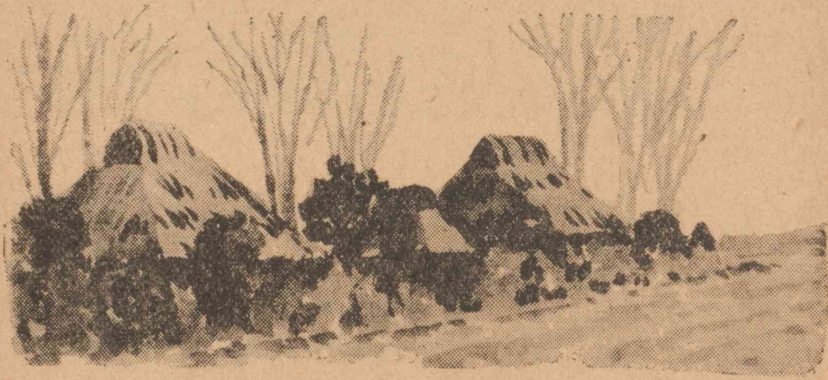
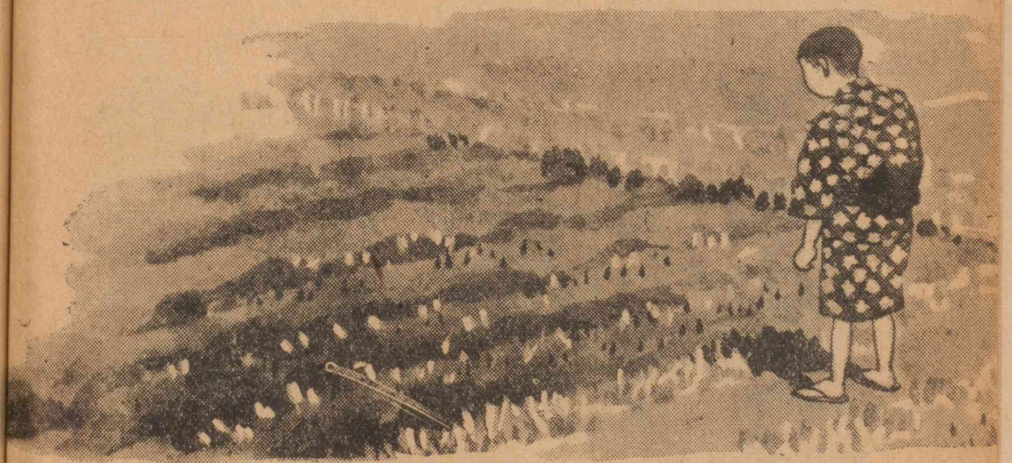
むくむくとこえふどり、

もりあがり、

農夫の手からこぼれるたねを待つ大地。

じゆうぶんによくねて目ざめたような大地。

からりとはれた青空、



ひばりでもなきそうな日だ。

いい季節になった。

こくぐらのすみっこでは、

こくもつのふくろのたねもさえずるだろう。

とびだせ、

とびだせ。

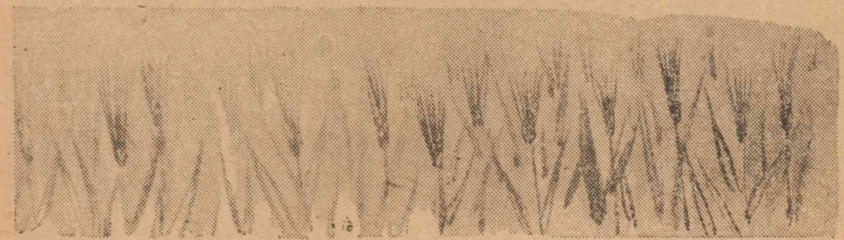
虫も鳥も人も、

みんなこの光の中へ！

みんな太陽の下に集まれ。

麦

麦はすこやかに、ゆたかに村をつつんでいく。
日光をうけ、青々とあかるんで、
麦はゆたかに村をつつんでいく。
麦の中につつまれたわらやねの美しさ。
麦の中に立つ木の快活なすがた。
麦はまるで広い海のように。
麦の中に人や家々や太陽はしずんでいく。
おお、いちめんの麦、太陽の麦。
麦の上の空のひとひらの雲もないほがらかさ、
おお麦！ 麦！ 快活な麦。
ゆたかで、みずみずしく明かるい麦。



のびていく麦。
風はそこに来てかれらを
かるやかにゆすって、
かれらと親しんでいるように見える。
風はそこに来て、日中楽しくおどる。
麦を見ると、わたしは明かるさを思い、快活になり、
ゆたかにひろびろとした麦のために、
うたいたくなる。
麦よ、のびよ。すこやかに楽しく。
暑い日、金色にじゆくしてかりたおされるまで。
かれらの道中の楽しさよ、
また、おまえのゆうかんさよ。



まるで人間のためにはえてくれるような、

おまえ、麦よ。

わたしはありがたく思うよ。

すこやかな麦。

しものふる寒い冬の季節から、

苦しみにたえ、

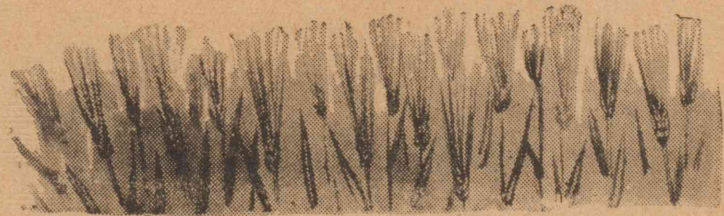
しかも、快活に人のために

さかんにのびつづけた

麦よ。

わたしは喜ぶよ、

麦！



二 春のさきがけ

第一の花

ひと雨ごとに、あたたかさをましてくるころ、さくらやうめのつぼみが少しずつふくらんできます。しとしと春雨のふったあとなどは、うめのえだが赤味をおびて、ぬれています。そうして、長い間雪の下になっていた、わら屋根の青ごけが急に生き返って、みずみずしく光ります。

雨がやむと、さらさらと気持のよい風がほおをなでて行きます。

青空の色もだんだんこくなって、あのひつじの群れでも見るような、さまざまの形をした、黄色がかった白い雲がうかんでいます。

わたしは春らしい光をふくんだ西南の空に、気をつけてこの雲を見ていたことがありました。

ぼつと雲の形があらわれたかと思うと、それがだんだん大きく、長くはつきりと見えてきて、南へ動くにしたがつて消えていくのです。

するとまた、二番目の雲の形が、前と同じ場所に出てきます。そうして、同じように大きく長くなって消えていきます。

やわらかいち色の空に、うかんで消え、消えてはうかぶ雲の美しさに、わたしはなんともいえない喜びを感じたのでした。

「暑さ寒さもひがんまで。」

という言葉を、土地の人はよくいいます。なるほど、そのとおりで、ひがんといい声を聞くとほつとします。長い間、雪にとじこめられた冬を通りこして来たうれしさを感じます。

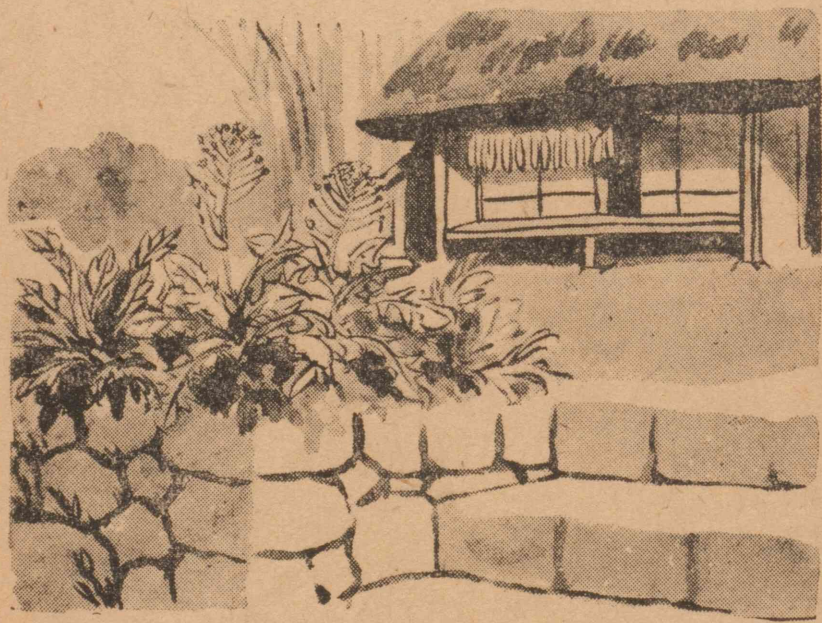
そのころまでかれ葉を落とさずにいるぶな、かたい大きなつぼみを持って、雪の中でしんぼうしたしゃくなげ、ひとつとして過ぎて行く季節の記念でない

ものはありません。

石がきの間にも、いたち草、よもぎ、よめな、そのほか数えきれないほどのいろいろな草が、頭をもちあげています。春はあんな所にも来ているのです。

わたしは、石がきの上に白い小さななずなの花と、むらさきがかつた名も知らない花を見つけました。

それが、この山で見つけた第一の花でした。



三光鳥を聞く

午前中はくもっていた空が、午後になって晴れた。晴れたと思うと、急に北西の強い風がふきはじめた。すなほこりをまきあげ、それが、赤いけむりになって空いちめんひろがった。道のすみっこにふきためられていた木の葉が、コロコロとかわいた音をたてて走って行く。コンクリートの上をすべって行くその音にも、冬のひところのように、とげとげした寒さは感じられない。

春だ、お日さまが落葉の上で光っているではないか。

いつの間にか、かきねの内の庭先には、うめの花がさいているらしい。たけがきの外を歩いてみると、花のにおいがただよってくる。なにげなくふり向いて、せのびをしてみると、白いうめの花のまっさかりだ。

だが、その少し向こうにはこうばいがさいているし、よく見ると、うすもも

色の花もさいている。どれもが九分どおりさいていて、今がうめのいちばんいい見時であることを物語っている。

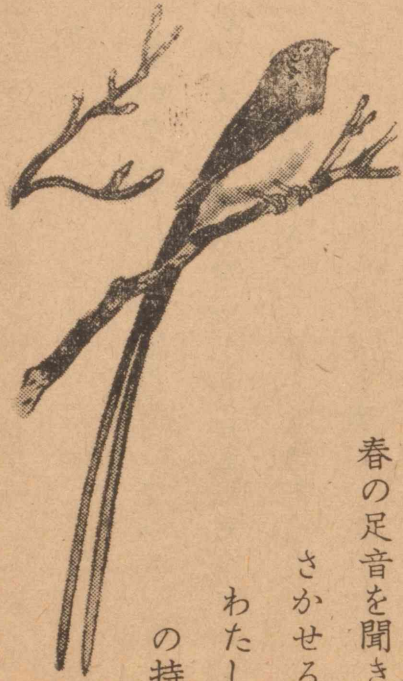
白い花といっても、まっ白ではなく少し黄色がかったのや、なんとはなしに黒ずんだように見えるものや、青色がかったものなどがある。

しかし、どれもこれも、うめらしい美しさを持っていることにはかわりがない。一まいの葉もなく、とにかく人間が寒い寒いといっている間に、ちゃんと

春の足音を聞きつけて、毎年このごろになると花をさかせるのである。

わたしは、自然というものが、ふしぎな力の持主であることを深く感じる。

その力は、いったいどこにかくれているの



だろうか。そう思いながら歩いていると、どこからか鳥のなき声が聞こえてくる。

鳥がないにはちがないが、なんという鳥がどんな声でなっているのか、よくわからない。わたしは足をとめて、じつと耳をすました。

しばらくすると、またなきだした。

「ギューギュー　フイーチー　ホイホイ」

まことにみごとなものである。すがたは見えないが、いつもこのあたりの林をかけて行く三光鳥であろう。

きようはまた、いつもとちがってとびきりよくないている。そのなき声が、月（ゲツ）日（ニチ）星（ホシ）と聞こえるというので、三光鳥という名をつけたのだそうだが、なるほどと思われる。

その三光鳥の声のする林の上を、たった一わだが、からすが見おろすような

かつこうで、飛んでいった。

三光鳥は、ときどき声高くなきながら、林の上をかすめて、向こうの方へ消えていった。

気がつくと、すずめが一わ屋根にとまって、わたしの方を見ている。わたしは、いきなり「ワツ」と、大声を出して手をあげた。すずめは、ころげ落ちるようなかつこうをして、ヒューツとすがたを消してしまった。

とつぜん、また、三光鳥がなきだした。さつきよりはだいぶおちついてないている。静かに聞いていると、いかにも春らしい感じにさそわれる。

あたりの岩かけに、すみれが一つ、かわいい花をさかせている。たんぽぽのくきがのびて、風にゆれている。

わたしは、わかわかしい力にみちた春の空気を、むねいっぱいすおうと思つて、大きくしんこきゆうした。

三 新 しい 力



まさお君は庭におりて、春の日をあびながら、あちらこちら歩きまわりました。

かえでのえだは、もうまっかな芽をふきだしています。やつでの新芽が、たけのこのような頭をつきだしていますし、どうだんの細かなえだの先は、みんな小さな玉をつけています。

庭のどこを見ても、やわらかな土をもちあげたり、かたいこずえをふくらませたり、かず知れない新しい芽が、みんな外をのぞきたがっていました。そして、ほかのものよりも先に、地上に顔をだした草の葉は、ぼくを見てくれというように、いきいきとした顔をあげて、いっしょうけんめいのびあがっています。

まさお君はいい気持でした。そろそろ厚いセーターをぬいてもいい時がきたのです。グラウンドにあの気持のよいバットの音がひびくのも、もう遠いことではないでしょう。

ふと、まさお君は、庭のすみに、どろまみれになったボールを見つけました。なんだ、去年の秋なくして、いくらさがしても見つからなかったのが、こんなところにあつたのか、—— まさお君はわらいながら、そのボールを拾いあげました。

ボールは去年の秋ここにころがりこんだまま、じつとひと冬を過ごしたのでしよう。だまつてころがつているボールの上に、いくたびか雪がつもり、またいくたびかとけていったことを思うと、まさお君は、長い長い冬が、とうとう過ぎさつたことを、はつきりと感じました。

それから、まさお君は、えんがわの下から小さなシャベルを持ち出してきて、

日かげに芽を出している草花を、日あたりのよいところに移してやりました。同じすいせんでも、日あたりのよいところにいるものは、もう花をつけているのに、日あたりの悪いところにいるものは、まだつぼみも持っていません。まさお君は、庭をぶらぶら歩きながら、見つけしだい、かわいそうな草花をあたたかいところに移し植えてやりました。

「もう、ないかしら。」

と、まさお君が見まわした時でした。さつきボールのころがついていた近くに、ぽつりと芽を出している、草花らしいものが目につきました。

「そうだ。あそこに、まだ一本ある。」

まさお君は、さつそく、それをほり出しにかかりました。

だが、ほりだして間もなく、まさお君は意外なことに出あいました。その草はどんなに深くとも、五センチとは土をかぶっていないだろうと思われたのに、

どうしてどうして、五センチほつても、七センチほつても、まだ根は出てこないのです。「ザクリ、ザクリ。」と、まさお君は、シャベルで、あなをほっていきました。

あなはだんだん深く大きくなり、まさお君の足もとには、しめっぽい土がしだいに高く積みあげられていきます。

うす暗いあなの中には、先の方だけ少し緑色をした、あお白いくきが、心細そうにのびています。十センチ、十一センチ、十二センチ、まさお君は熱心にほっていきました。しかし、根はなかなか出てきません。



十五センチをこえるころには、まさお君はむねがわくわくしてきました。この一本の小さな草が、こんなに深い地の下から、よく頭をもちあげてきたものだ。まさお君は、いつの間にか、このふしぎな力を持った小さな草に感心してしまいました。

二十センチになっても、まだ根には達しませんでした。まさお君は、そのひよろひよろとのびた、あお白いくきを見つめました。

それは、草花というよりは、ねぎにそっくりでした。それにしても、これだけのびるのに、いったいなん日かかったことでしょう。

少なくとも、十日や十五日でないのにきまっています。してみれば、まだ地面に雪の残っているところから、この草は、春の近づいたことを知って、そろそろと地の底で芽を出しはじめたのにちがいありません。

そして、暗い土の中で少しずつ、休まずにのびてきて、やっとこのごろ地上に顔を出したのです。

「なんと、しんぼうがいいんだらう。」

とまさお君は、心の中でさげびました。だれも見えていないところで、だまってこれだけの努力を続けていたのかと思うと、まさお君は何かむねにせまるものを感じました。

このへんな形をした草は、もうまさお君にとって、どうでもいい相手ではなくなりました。

「よくやった。よくやった。」

まさお君は、声をかけてやりたい気持ちで、また、熱心にほり続けました。

どうとう根があらわれてきました。それがすいせんの球根であることは、まさお君にも、すぐわかりました。どうして、そんな深いところに、すいせんの球根がまぎれこんだのか、それは、まさお君にはわかりませんでした。

しかし、そんな深いところにうずめられてしまっても、この球根は死んでしまわなかったのです。そして、命のあるかぎりには、厚い土にへだてられながらやっぱり太陽の熱を感じ、春が近づけば芽を出して、明かるい地上に向かつてのびていかずにはいられなかったのです。

まさお君は、そのへんなすいせんをつるしあげてみました。三十センチばかりあるところをみると、地上で花をつけているなかまと、ほぼ同じくらいのせただけです。だが、だれが見ても、すいせんとは見えません。

白いくきの部分は、どう見てもねぎで、ただ、ちよつぴりと緑にそまっていた頭だけが、そう思つて見れば、すいせんの葉の頭でした。

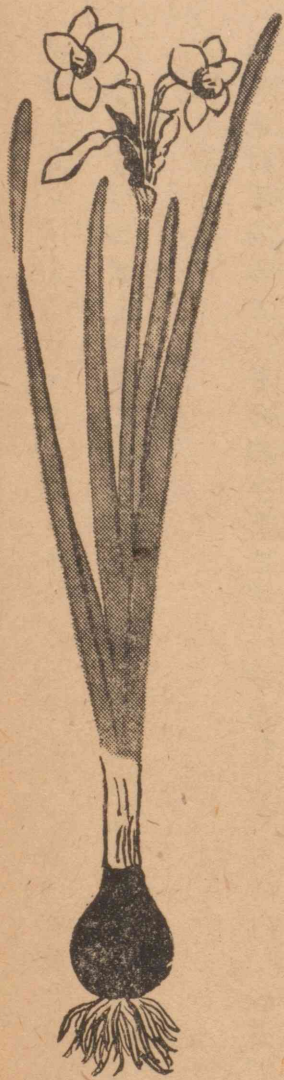
まさお君は、このへんなかつこうのすいせんを、ほかのなかまのところへ持つていって植えてやりました。深くあなをほつて、白い部分は、やはり土の下にかくしてやりました。

ほかのすいせんたちは、あざやかな緑色の葉を、すくすくとのばし、こい黄色な花を開きかけています。

そのわきに、ちよつと頭を出している、この植えたてのすいせんを見ると、まさお君は、こつけない気がしながら、かわいらしくてたまらない感じがしました。あのあお白いくきが、土を通して見えるようでした。

「そうだ。あんな深いところからでも、このすいせんは、のびてこずにはいられなかったのだ。」

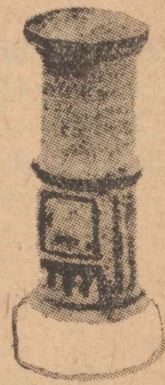
まさお君は、もう一度、それを思いました。



のびてこずにはいられなかつた力は、わずか三センチばかりの緑の中にもみなぎって、小さなつつましいこの草に、ちゃんと頭をもちあげさせているのです。だが――

だが、目をあげてみると、そののびてこずにいられないものは、かえての中にも、やつでの中にも、どうだんの中にも、いや、あらゆる草木の中に、今やいつせいに動きだしているのです。

まさお君は、どろだらけの手をはらうこともわすれて、しばらく、あたたかい日光の中にじっと立っていました。のびていかずにいられないものは、まさお君の中にも、やっぱり動いているのです。



(二) 心と心

一 先生へ (まさおの手紙)

先生、お元気ですか。

ぼくは、いま先生のお顔を思い出しています。

ぼくたちはみんな、とても元気で、毎日学校へ通っています。遊ぶ時間や、学校からの帰り道で、先生のことをお話することがよくあります。

このあいだも運動場で遊んでいると、校長先生が、

「きみたちは何組かね。」

と、おたずねになったので、ぼくはつい、

「はい、田中組です。」

と答えて、はっとしたことがあります。

先生が大阪の学校へおかわりになってから、もう一か月以上もたっているのですね。

先生がおかわりになってから二、三日して、また、すみ子さんがかわりました。おとうさんが転任なされたので、おうちの人といっしょに、そこへ行ったのです。

先生とお別れし、その上、すみ子さんもかわって行って、さびしい気がしていました。けれど、新しい先生がおいでになって、このごろはみんなとても楽しそうです。

新しい先生は、山本先生といえます。やさしく、親切に教えてくださいます。山本先生はいつも、「聞く、話す」「自分で」と、おっしゃいます。

「聞く、話す」というのは、人の意見をよく聞き、自分の意見も発表せよということです。

「自分の思っていることを、思うままに話すことはたいせつです。しかし、人の意見を聞くことをわすれてはいけません。

みなさんは、自分の意見を発表することにむちゅうで、人の意見を聞くという心がけがたりません。これでは、とてもうまく話し合えないでしょう。」先生は、いつもこんなにいわれます。

「自分で」というのは、何事も自分から進んでせよということですよ。

みんなは先生のこの言葉を守って、勉強しています。このごろは、りっぱに討議をするようになりました。学級のこと、ぼくたちの手でやっています。

学級新聞の編集もできます。名前は、「なかよし新聞」とよんでいます。

「平和新聞という名にしたらどうでしょう。」

「この組の新聞だから、ぼくは山本級報がいいと思うね。」

「なかよし子供新聞もいいよ。」
などと、いろいろな考えが出ましたが、「なかよし新聞」とよぶことにきまつた
のです。きのう、第三号を出しました。先生は、
「なかなかいい新聞ができるね。五年生でこれだけりっぱにできるとは感心な
ことだ。」
と、ほめてくださいました。

去年教えていただいたソフトボールも、じょうずになりました。このあいだ、
五年西組とした時などは、八対二で勝ちました。先生も、お喜びになって、
「こんどは六年生としよう。」
とおっしゃったので、みんないっしょうけんめいに練習をしています。
こちらは、毎日、いい天気が続きます。
このあいだ、町はずれにいつてみました。すると、いつの間にか麦のほがす

っかり出そろっていました。

空高く、ひばりが鳴き、向かいの山には、
つつじがたくさんさいています。ときどき、
ほととぎすの声も聞かれます。

いつか先生から教えていただいた、
ほととぎす鳴くやひばりと十文字
というはい句は、こうした景色をうたったも
のだろうと思います。

これからは、だんだん暑くなることでし
う。先生、からだをだいじにしてください。

さようなら



二 わたくしのすむ町（先生の手紙）

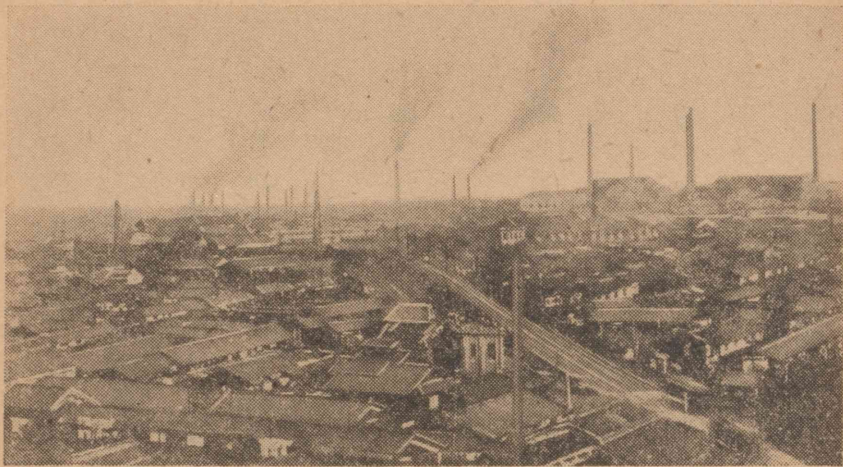
お手紙ありがとうございます。

けさ学校へいくと、つくえの上に手紙がのっている。だれから来たのだろうかと思つて、急いで手に取つてみると、見おぼえのあるなつかしい文字で、あて名が書いてある。すぐ、まさお君からのだということがわかった。

山本先生のお言葉を守つて、みんな元気ではげんでいるとのこと、こんなうれしいことはない。

ついこのあいだ別れたような気がするのに、もう一か月以上にもなるのだね。静かに目をつむると、汽車が動きだして見えなくなるまで、さかんにぼうしをふつて送つてくれたみなさんの顔が、まさまどうかんでくる。

手紙によると、麦のほがほとんど出そろつたとのことだが、こちらでは一時



間近くも電車にゆられてこうがいへ出なければ、見ようと思つても見られない。町にはぎつしりと家がたてこんでいて、いたるところに高い建物が、よきよきよきとそびえている。なんととっても、わが国で二番目に大きな町で、まさお君の町などとはとても比べものにならない。

汽車で大阪駅に近づくと、どんなによく晴れた日も、空がくもつたように見える。町の東から南にかけて、林のように立ちならぶえんとつからふきあげるけむりが、町全体を黒雲のようにおおっているのだ。こんなことから、この町をけむりの都という人もある。

駅の近くには、いくつもの高い建物が、かたをならべてそびえている。その中でもいちばん高いのは、駅のすぐ前にあるデパートである。

この屋上からは、広い町がはるかに見わたされる。白いアスファルトの道が、この下から四方に通じ、その上を電車が走り、自動車が行き、人の群れが、ありのようにならざるゝと動いている。うしろの駅から、一日なん十万となくはき出される人の波が、この建物の下に集まる。こうがい電車がここから北と西に走り、地下鉄が町の下を走っているのだ。

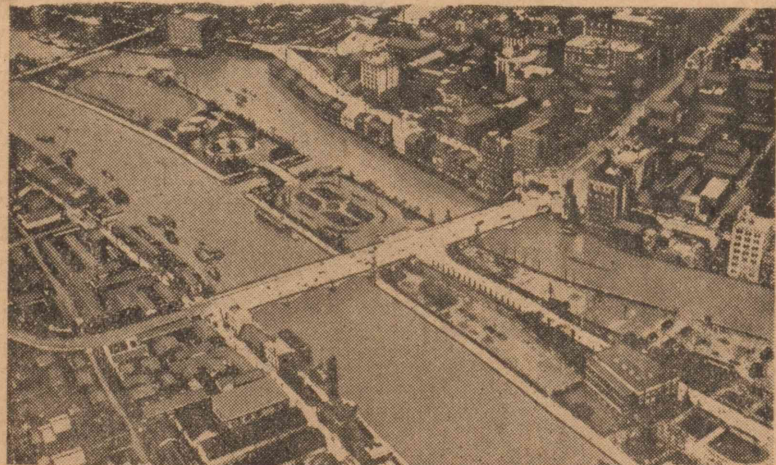
南へ目を向けると、大通りの左手にまるい青屋根の建物が、立ちならぶ家々の間から頭を出している。この町の図書館だ。館内には、さまざまな本がぎっしりとならべられ、日曜日などは広い館内が、いろいろな人でいっぱいになるそうだ。

図書館のすぐ横の川をはさんで、両岸は公園になっている。公園はそんなに

広いとはいえないが、川を中にはさんだながめは、そのまま水の公園といつてもいいくらいだ。

わたくしもこのあいだ、友だちとここを歩いた。午後の日ざしが水面いっぱいにかがやいて、プラタナスのわか葉が、五月の風にゆれては、何事かをささやいているようだった。町のさわがしさに比べると、ここはねむったように静かで、ときどき「ゴォー」と聞こえてくる電車のひびきが、あたりの静けさを破っては、また、もとの静けさに返る。午後のひとときをこの川にボートをうかべて、楽しんでゐる人のすがたも見受けられた。

北から西にかけてはずつとひらけ、ところどころ



に高い建物が、ぬつとそびえている。はるか北西には、この町に流れこむ大川が、おびのように白く光り、西の方にはこうがい電車が遠くへ走っている。

この町でいちばんにぎやかなところは、なんといっても町のまん中にある商店がいた。きれいなアスファルト道の両側には、大きな商店がぎっしりと立ち並び、人の波があとからあとからおしよせる。夜になると、あたりいちめん電燈の光がかがやいて、町は火を流したようになる。

けむりの都であるとともに、この町はまた、水の都だ。町の中にはたくさん
の川が、あみの目のように流れている。この町の港に集まってくる荷物は、小船でこの川をつたって町々へ送られ、また、町々の品物も多くはこの川を通して、港へ送られる。

このように書いてくると、大阪がどんな所か、また、どんなに大きいかも、少しはわかったことと思う。今まで書いてきたことは、この町のほんの一部だ。

このほかに、まさお君にお知らせしたいことは山ほどある。しかし、いちいち書いてはきりが無い。そのうちに、また、絵はがきをお送りしよう。

このような町にすんでいると、毎日見るものは家ばかりだ。右を見ても家、左を見ても家だ。ただ、日ましに強さをくわえてきた日の光と、目もさめるようないろいろじゆの緑が、春の深いことを感じさせてくれる。

さて、学級新聞に「なかよし新聞」という名前をつけたそうだが、これにはわたくしもさんせいだ。やさしくてとてもいい名前だ。わたくしたちの理想はおたがいになかよくして、生活を楽しむことだ。学級のものになかよくし、国中のものがなかよくし、世界のものがなかよくする。そこに平和があり、そこに文化の花がさく。

いつまでたつても、げんこうが集まらない。

いつもきまつた人のげんこうがのせてある。

一部の人が、自分かつてな編集をする。

こんなことでは、みんながなかよくしたとはいえない。また、いい新聞はと
てもできない。

わたくしはきみたちが、「なかよし新聞」を中心としておたがいになかよくし、
りっぱな人として成長してくれることを、楽しみにしている。

手紙は、おたがいどんなに遠くはなれていても、わたくしたちの心と心を
つないでくれるたいせつな糸だ。これからもときどきお手紙をください。組の
みなさんにもよろしく。

では、元気で、さようなら。

三 小さな研究報告（すみ子の手紙）

お手紙ありがとうございます。夕はんのあとなどで、まさおさんのことを
お話するのですが、ずいぶん長い間おたよりしないで、ほんとうにすまないと
思っています。

わたくしはこちらへ来てから病気ひとつせず、とても元気です。もうすつか
り学校にもなれ、新しい友だちもできて、毎日楽しく勉強しています。

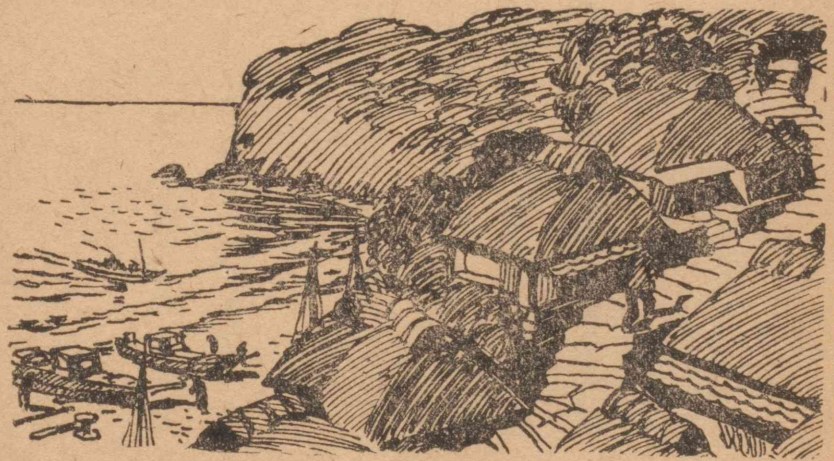
こちらは、まさおさんの町とはずいぶんちがつて、緑の山にとりかこまれた、
さびしい漁村です。つぎに、わたくしが研究したこちらのようすを、お知らせ
することにしましょう。

○

わたくしの村の研究

△ 村のようす

村のすぐうしろには、きり立った山々がおおいかぶさるようにせまり、そのふもとから海岸にかけて、草ぶきの家がぎっしりと立ちならんでいる。どの家もわりに小さく、庭などはない。道の横の少しばかりの土地に、麦やまめが植えてあるが、畑はほとんどない。畑といえば山の中ほどからいただきにかけて、ところどころに、だんだん畑が見られるぐらいである。道はせまくて、右におれ左におれ、ごたごたといりくんでいる。中には、行きづまりになるものもある。



わたくしの村がこのようになっていっているのには、つぎの二つのわけが考えられる。

1 土地がたいらでなくせまい。

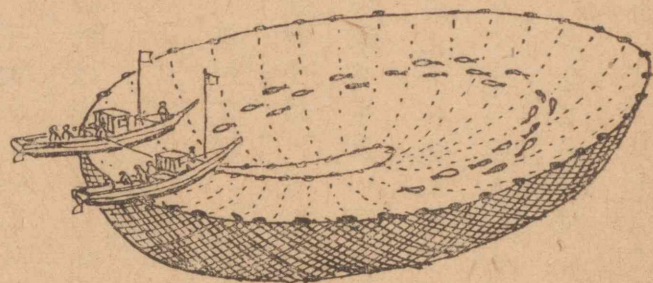
漁村は港と深いかんけいがある。どんなにせまい所であっても、波が静かであつたり、さかなをとるのにいい所であれば、そこに村ができる。

2 漁村には、大きな家や庭の必要がない。

農村では、とれた農作物を家の中にしまつする必要がある。そのために、どの家でも広い庭を持っているだけでなく、くらや小屋が必要である。また、うしやにわとりなどを入れる小屋もある。ところが漁村では、とれたものはすぐ町へ送られる。

△ 魚をとる方法

魚によつてとる方法もいろいろであるが、ふつうは、つぎの二つの方法が行



われている。

あぐりあみ

はばが八十メートル、長さが四百メートルあまりもある大きなあみで、いわしをとるのに使われる。あみの下には、かねのわがたくさんつけてあり、そのわにじょうぶなつなが一本通してある。いわしをとりまいたら、急いであみを引きしめる。すると、あみの下がむすばれて、とりまかれないわしは、にげることができなくなる。夜など、明かるい電燈でいわしを集めて、このあみでとる。

はえなわ

中心になる一本のなわに、たくさんのはえなわをつけ、その先へ一つずつはりをつけたもので、さばやたいをつるのに使う。はえなわを投げ入れてから数時間して、魚がかかったところをみて引き上げる。

さばのように水面近くにいる魚をつる時には、水の上の方にうかし、たいのように底の方にいる魚をつる時には、海の底にせずめてつる。

△ 漁村の生活

漁村の人々の仕事は、たいてい夜のうちに行われる。ひるまの漁村は、女の人にはせんたくをしたり、海岸でのりをとったり、みんないそがしそうにしているが、男の働いているすがたは、あまり見かけられない。おじいさんが海岸であみをつくろったり、船をなおしているのときどき見かけるぐらいである。

漁村がいちばん活気づくのは朝である。東の空がしらみかけるころ、村の人々はもうみんな起きたし、家々では朝ごはんの用意がはじめられる。やがて、まっかな太陽が水平線にのぼるころ、りょうから帰って来る船を、村中そう出でむかえる。

「おうい、船が帰って来るぞう」。

「大漁だ、大漁だ」。

こうした活気にあふれた声が、毎朝、うらの山にはじける。平和な漁村の一日は、こうしてはじめられる。

○

まさおさん。お知らせしたいことは、まだまだたくさんあります。でも、きょうはこれでお別れします。さようなら。

四 日記のたより（一ろうの手紙）

まさお君。お手紙ありがとうございます。

ぼくはとても元気です。おとうさんもおかさんも元気で、このごろは毎日たんぼに出ています。

いなかは、今がいちばんいそがしい時です。ついこのあいだまで、青々としていた麦畑が、ここ二週間ほどのうちに、すっかり色づいてしまいました。

もう、とりいれをしているたんぼもあります。からりと晴れわたった空に、だっこく機（はた）の音が気持よくひびいています。——あ、そうだ。こんなことを

ながながと書くよりも、ぼくのこのごろの日記を、ぬき書きして送りましたよ。それによって、ぼくが何をし、どんなことを考えているかを想像してください。

六月六日

ぼくの家でも、きょうから麦かりがはじまった。おとうさんが、

「一ろうも五年生だ。そろそろけいこをするかね。」

とおっしゃった。ぼくは、はじめてなのでうれしくてたまらない。ただむちゆうでかった。しばらくすると、せなかがあせてべつとりしてきた。ひたいからあせが落ちる。目がかすむ。

ぼくは、はじめて麦かりの苦勞を知った。



六月八日

きょうは麦こきをしました。

「ザアーツ、ザアーツ」とかるい音をたてて、飛び散る麦を見ていると、苦しかった麦まきも、寒かった麦ふみも、今となってはみんな、なつかしい思い出です。

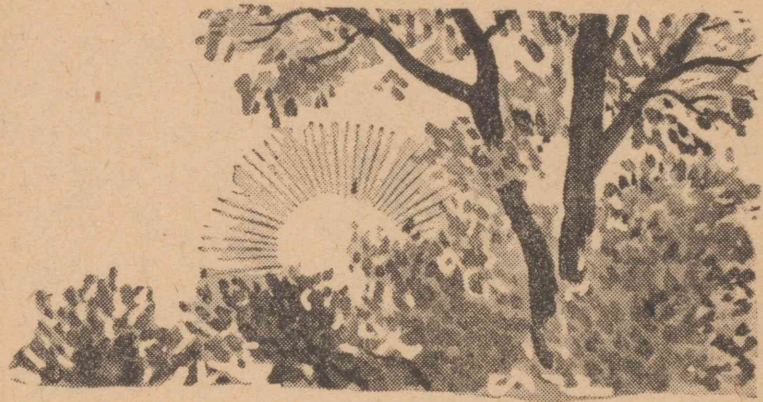
「心配していたが、ことしもなかなかいいみのりのようだ。」

「いっしょうけんめい世話をしたおかげですね。」

「六俵もとれるかな。」

ぼくは麦を運びながら、おとうさんとおかあさんが、こんな話をしていらっしやるのを聞きました。

ぼくにはよくわかりませんが、ことしも豊作のようです。



六月十日

つゆが手足に落ちる。

おとうさんもおかあさんも

だまつて草をかっておられる。

さつく、さつく、

かまの音が、

静かな山の中にひびいていく。

風がふく。

つれてきたうしが

たいくつ、そうになく。

木の間から

朝日がまぶしく光りだした。



六月十二日

このあいだ、学校で和歌の話聞いたので、ぼくも作ることにした。まず自分でしたこと感じたことなどを、そのままあらわすのがよいのだと聞いたので、このあいだの麦かりのことを和歌にしてみた。

あせふいてふと見あげれば新緑のつかれたる目になつかしきかな

どうも、作ってみるとあの時のようすがうまく出ていない。それでなにか和歌についてのいい本はないかなと思って、さがしたらこんなのがあった。その人ははじめ、

新しき緑の色のこちよくつかれ目にもしみとおるかな

とよんだというのである。ぼくはうまいものだなと感心した。ぼくのもうと

したような気持がほんとはよく出ている。

ところがその人は、どうもそれでは満足できないので、

はつ夏の日の光うけあせばめるからだに風のこころよきかな

と作りかえてみた。こんどは、たいぶ気持は出てきたようだと思ったが、なんとなく調子がわるいので、

はつ夏の日の光うけあせばめるひたいにうつる新緑の色

となおしてみた。そうしてはじめて「これでいい。」といったのである。ぼくもこんなふうにならぬかと和歌で自分の気持や考えをあらわせるようになりたいと思つた。

六月十四日

このごろかえるの鳴き声が、ずいぶんやかましくなってきました。今まで遠くの方で「クク、クク」と鳴いていたのが「コロコロ、コロコロ」と近くで聞こえるようになりました。

ひるまは、働く人々や、うしにえんりよするのように声をひそめていますが、夜になると自分たちの世界だとばかり、さかんに鳴きたてています。

前のたんぼにほたるがすーっすーと飛んでいます。くらやみの中から「一ろろ君、一ろろ君」とよぶ声が聞こえてきたので、外へ出てみると、日野君たちでした。

みなで土橋の方へいき、流れの上を飛ぶほたるを見ました。空には星がきらきら光っていました。

六月十五日

きよりの日記には、ぼくのすきなはい句を書きつけておくことにしよう。

長き日をさえずりたらぬひばりかな

はせを

春雨の中に芽をだすあやめかな

児童

すいすいとなわしろの上をとぶつばめ

青い山に白い大きなゆり一つ

わがそでに来てはね返るいなごかな

子規

○

まさお君。ここ二週間もすれば、田植えもすっかり終ると思います。その時には、ぜひおとうさんと遊びにいきます。

ではさようなら。

(三) スポーツ

一 ドッジボール大会

試合が始まった。相手は五年西組である。みんなが、さかんにはく手を送ってくれる。

西組のセンター山本君のボールは、すばらしい勢をもって飛んで来る。しかも、こしから下をねらうので、なかなか取りにくい。味方が、ひとりふたりとたおされていく。じょうずな道男君まで、たおされてしまった。そのうちに、ぼくを目かけてボールが飛んで来た。すくいあげるようにすると、うまく取ることができた。「ワアッ」という声が聞こえた。

この時、味方は三人になっていた。すぐに道男君にわたすと、道男君は取る

がはいか西組の人のせなかに投げつけた。ボールはころがって、また外野へ返って来た。かず子さんが投げる、春男君が投げる。内野の味方がつきつきにふえてきた。しかし、西組もなかなかじょうずである。外野へわたすボールを、とちゅうで取ってはぎやくにせめてくる。たおしたり、たおされたりして、勝負の見分けもつかないうちに、前半終りのふえは鳴った。人数を調べると、九対八。一点のちがいで勝つことができた。

場所をこうたいして、後半戦にはいった。ぼくは外野にまわった。

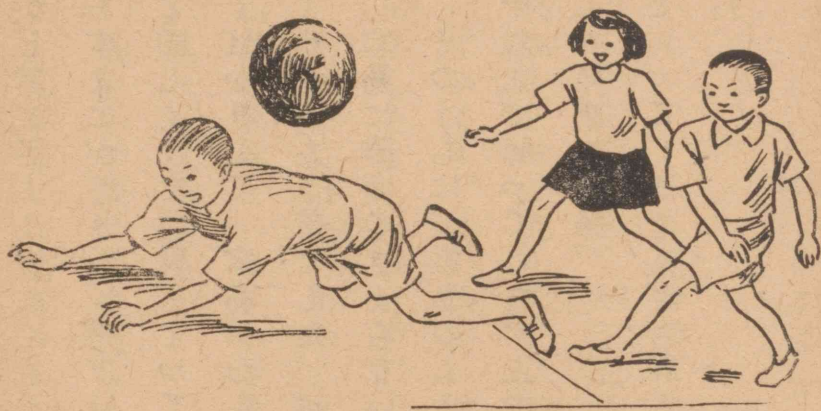
西組は、こんどこそはと、いっしょうけんめいである。とりわけ女子がぐんぐんせめてくる。投げつけると、じょうずに受けて、男子のセンターにわたしていく。れんらくのみごとなこと。そのため、味方は、ばたばたとたおれていく。おうえんだんは、「フレイ、フレイ」と声をからしてさげんでいる。その時、かず子さんが、ボールを受けて、ぼくにわたしてくれた。カいっばい西組の人

に投げつけると、うまくあたって、ボールははね返って来た。その時、終りのふえが鳴った。こんども六対五で勝ち、いよいよ決勝戦に進むことになった。

決勝戦は、六年西組とするのである。相手はこの前ゆう勝した組で、強いことは校内第一といわれている。しかし、ぼくたちは、いっしょうけんめいに戦おうと決心した。どの学年も、東組はぼくたちに、西組は六年に、全校が二つに分かれておうえんをしている。

上田先生のふえの合図で、試合が始まった。相手はこの前ゆう勝しただけあ





取り返さないうちに、終りのふえが鳴った。七対三でぼくらの勝であった。

一対一の勝負である。決勝戦にはいった。こんどは、六年もいっしょうけんめいである。とりわけ、センター石川君のボールは、ものすごい勢で飛んで来る。そこで、ボールを取ったら、相手にわたさないようにくふうした。ボールを、味方の内野から外野へ、外野から内野へとれんらくしながら、その間に、すきをねらっては相手をたおしていった。

この作戦は、みごとにあたって、六年の内野は、しだいに少なくなっていくた。ぼくは、外野のた

って、内野と外野のれんらくがじょうずである。強い勢のボールが「ビュウツ、ビュウツ」と、飛んでくる。みるみるうちに、内野はたおされていって、六年を三人たおしただけで、味方はひとり残らずたおされてしまった。

中の休みに、作戦をねった。その時受持の先生が二つのことを注意してくださった。

「相手が六年生だといっているので、おじている。もつと元気を出すことだ。」

「外野からせめられる時、一方にかたまっではいけない。」

そういわれてみると、戦う前から、少しおじていたようである。また、外野からせめられる時は、たいてい、かたまっていた。

後半戦の始まるふえが鳴った。こんどこそはと、全力をつくした。外野とうまくれんらくをとって、つぎつぎと六年をたおしていった。

見ちがえるほど強くなったぼくらに、相手はあわてだした。が、もうおそく、

かし君とボールのれんらくをしながら、急に石川君へ投げつけると、うまくた
おすことができた。味方は、「ワアッ」といって喜んだ。しかし、六年もこちら
と同じような作戦をとってきた。ボールを手に入れると、内野、外野のれんら
くばかりして、容易にわたさない。ぼくは、思いきりとびあがって、六年のボ
ールをたたき落とすとした。ボールが味方に来たので、また、六年をせめた。
容易に勝負のきまらないげき戦が、続いていった。
そのうちに、終りのふえが鳴った。負けていると思っていたが、意外にも、
十対九で勝っていた。上田先生が、

「五年東組の勝」

といつて、手をあげられると、西組からも東組からも、一度にはく手が起こつ
た。

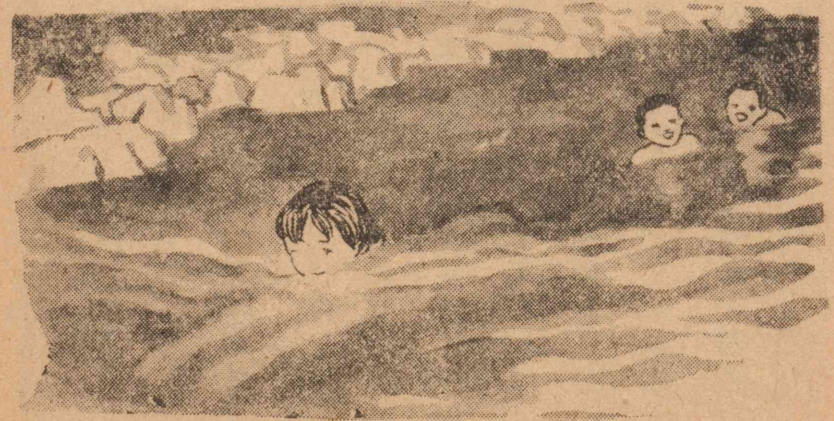
二 かがやかしい記録

紀の川に育つ

吉野山の北側、大台原の水を集めた吉野川は、和歌山県を西に流れて紀の川となり、きい水道にそそいでいます。この川が、すぐれた女子水泳の選手前畑さんをうんだのです。

前畑さんは高野山のふもと、紀の川にのぞむ和歌山県の橋本という小さな町に生まれ、紀の川の美しい流れて育ちました。

橋本小学校は校長先生をはじめ、スポーツのすきな先生が多く、前畑さんが四年生になった時、夏の



スポーツは水泳がいちばんいいといって、みんなて自由形や平泳ぎを熱心に教えてくれました。これまではいぬかきばかりで泳いでいた前畑さんは、どうしたとか平泳ぎに心をひかれ、泳いでみるとどんどんじょうずになって、男子の自由形と競争までできるようになりました。六年生になった時、はじめて浜寺の水泳大会に出て、ゆう勝しました。

昭和二年九月、大阪市立プールでは、子供だけでなく、おとなを入れての百メートル平泳ぎで日本一となりました。そのころ、女子平泳ぎでは女学生の飯村さんがすぐれていたのですが、その人のつくった記録をやぶったのです。

ところが、そのあとで橋本小学校の先生たちの間に、ひとつの問題がおきました。あるざつしに、前畑さんをほめる記事がのったのです。これを見せるのがいいかどうかで、いろいろな意見が出ましたが、これから後もしっかり努力するようによくきかせて、読ませることになっておさまりました。

この前年にも、先生をまごつかせるできごとがありました。強い相手のない前畑さんは、いい記録をつくることだけがめあてですが、正しい記録は、紀の川の上よみにつくったプールでは出ないので、ときどき、同じ町の小学校にあるプールにいった記録をとりました。ある日前畑さんは、二百メートル平泳ぎの記録をとりました。じつと時計を見つめていた校長先生は、泳ぎ終わった前畑さんを見てもだまっただまま立っています。そのころの日本記録は飯村さんがつくった三分三十九秒八であったのに、校長先生の時計のりは、三分三十四秒をさしていました。うっかり本人にはいえないと思って、帰ってからまずほかの先生に話したら、喜んだ先生たちは、いきなり前畑さんをだきあげてむかえるありさまでした。時計がこわれていたのではないかと疑って、時計屋にも調べさせたが、くるいのないことがはっきりしました。こうして泳ぐたびに記録はよくなっていきました。

しかし、大阪から遠くへの試合には出たことがなかったので、前畑さんの名前は近くの人たちに知られているだけでした。それがいよいよ日本中に知られる日が来たのです。

ハ、ワ、イ、へ

昭和四年の夏ハワイで行われる全米女子水泳大会に、日本の選手が招かれたので、それに出る人をきめる会が、六月末に東京で開かれることになりました。町の人々の熱心なすすめによつて、前畑さんは出てみることにして、校長先生といっしょに東京へ行きました。

ここで前畑さんは、はじめて飯村さんと顔を合わせるようになりました。二百メートルでは日本一の飯村さんを、前畑さんがどこまで追うか、人々はかたずをのんで見守っていました。前畑さんには生まれてはじめてのぶたい、飯村

さんがずいぶん大きく見えます。

ひかえ室で始まるの合図を待つ間、おそろしさでむねがいつぱいでした。その時、見知らぬ学生が「前畑、がんばれ。」と、どなったのを今になつてもわすれないと、前畑さんはいつていますが、それほどはりつめた試合であつたのに、泳いでみると、試合はあつけなくすみしました。

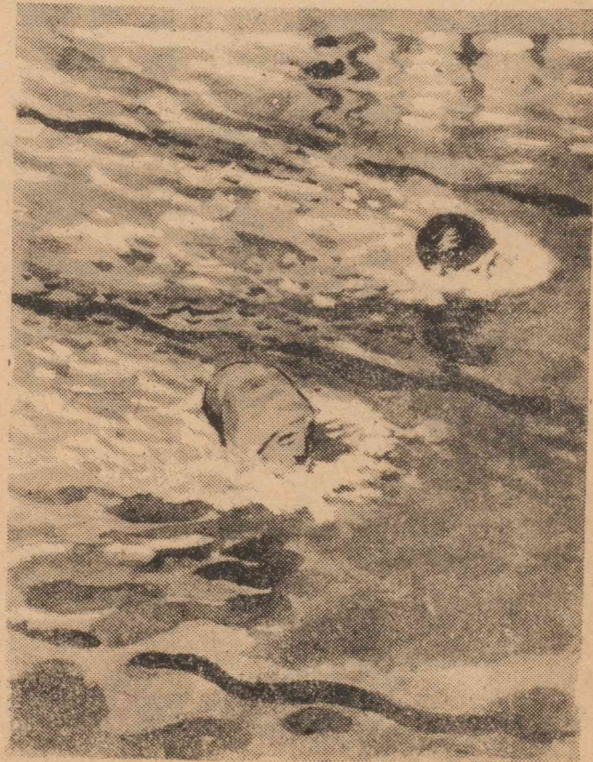
むちゆうに泳ぎ終つて、後をふりかえつたら、飯村さんは二十メートルあとをまだ泳いでいました。この時つくつた三分二十一秒四は日本新記録であり、前畑さんが、ハワイに行くひとりとして選ばれたことはいうまでもありません。

そのころ、アメリカの女子水泳は世界一といわれていました。平泳ぎのゲラチーさんは、前年の全米大会に二百メートル三分十九秒四の記録を出しています。ハワイについた前畑さんは、旅のつかれも知らず調子がよくて、練習の間にも、どんどんいい記録を出しました。そのために、このふたりが顔を合わせる

試合は、たいへんな人気をよぶ
ことになりました。

試合が始まりました。

スタートをして水にういた時、
前畑さんはゲラチーさんとだ
ぶはなれていましたが、ぐんぐ
んつめていきました。そして、
一度は頭をならべて泳ぎました
が、後半でわずかにぬかれてし
まいました。ゲラチーさんの三分十七秒はアメリカ新記録であり、前畑さんの
三分十九秒も、自分のつくった記録の中でいちばんいいものでした。試合がす
んでゲラチーさんが、



「前畑さんがいなかったら、わたくしはあんな新記録は出せなかつたでしょう。」
といったのは、心から出た言葉だといえましよう。

泳ぐ楽しさ

ハワイから帰った前畑さんは、名古屋の女学校に転入することになり、長い
間の川の生活に別れをつけ、プールの生活にはいりました。

前畑さんは、小学校のころの気持を、

「わたくしは何か大きなものにあこがれていました。どこの試合に出るにも、
校長先生といっしょでした。あとをついて歩く時、先生のようにりっぱな
人になりたいと、そのくつのあとを、一つ一つていねいにふんで歩いたもの
でした。」

と書いていますが、その大きなものへ、だんだんと近づいていったのです。

ここでの前畑さんは、ただ泳ぐ練習だけでなく、プールのそうじや整備から、何から何まで、そばで見る目もいじらしいほどいっしょうけんめいに行いました。ハワイでひけめを感じたスタート、ターンの練習はもちろん、手足を強くすることにも苦心したかいがあって、記録はどんどんりっぱになっていきます。

昭和五年のあちこちの大会では、泳ぐたびに新記録をつくっていきました。

ところが、あくる年の一月に前畑さんの母が、六月に父がなくなつたので、ふるさとに帰って、学校をやめようと考えました。が、あたたかい町の人々にはげまされて、もとのプールにもどつてきました。しかし、昭和二年から毎年きまつて自分のつくつた日本記録をあらためていった前畑さんですが、さすがにこの年だけは足ぶみをしています。でも、はげしい練習だけは続けていきました。毎朝五時前に起きてプールにとびこむならわしも、このころからついたので。プールの水はま夏でも冷たいのですから、五月、六月ごろはなおさら

ですのに、休まず続けていきました。

前畑さんは、自分の泳ぎに強い反省をするようにもなりました。それはただ記録のかわりかたにたよるよりしかたがありません。たったひとり練習をするのですから、記録を知りたくても、毎朝とつてもらうわけにもいきません。そこで、つぎのようなやり方を思いつきました。スタート台にイスを重ねて時計をぶらさげ、時計をおして十秒たつと、どんとスタートをする。一往復するたびに時計のほりをにらんでがんばる。泳ぎ終つて十秒たつたら時計をとめる。この記録が悪ければまた泳ぐ。自分で満足のできる記録が出るまでは、二回、三回とくり返す。満足するまでいくと、ぬくもりのさめたねどこの中にもぐりこみました。

冬になつても、一日でも運動をしないと気分が悪いので、近くの山に登るのを毎日のならわしにしていました。同じ山に登るにしても、足首を強くするた

め、つま先で歩くようにしました。ひまがあればなわとびをする。たま入れもする。ロサンゼルス大会のある昭和七年の三月にはいると、待ちかねたようにプールにとびこみ、からだをまっかにして、練習を続けました。前畑さんの練習は、はげしいもので、人が五百メートルですませば、自分は千メートル泳がないと気がすまないというようなものでした。

ロサンゼルス大会

ロサンゼルス大会の選手をきめる会が東京で開かれました。前畑さんはもちろん、選手のひとりに選ばれました。

そのころ、世界の国々にすぐれた選手がいるので、前畑さんはうまくいって、四着か三着ぐらいだろうというのが、多くの人々の考えてした。前畑さんも、ぜひ勝たなければならぬというはりつめた考えはなく、らかな気持ちでいました。

しかし、ロサンゼルスに着くと、毎朝五時に起きて、はげしい練習にはいりました。しばらくして記録をとってみると、どうしても三分十五秒がきれません。少しいらいらしましたが、練習をひかえめにしてみたら、足がとても軽くなりました。

八月六日のはじめの試合には、まさか一着になるとは思わなかったのですが、泳いてみると、三分十秒七といういい記録が出て、決勝に進むことができました。前畑さんはすっかり自信がつき、決勝では三着ぐらいになるかも知れないと、思うようになりました。

しかし、ゆう勝をめあてにせず、追う者の気持はらくでした。ただ自分の全力をつくせばいいと考えていたので、おちついていました。

三日後に決勝がありました。前畑さんは、となりでだれが泳ごうと、少しも

気にしませんでした。ただ力の限り泳ぎました。デニスさん、ヤコブセンさんとならんで、最後まで先頭を争いました。一メートルをはなしていた先頭のデニスさんを追って、前畑さんの頭がデニスさんとならんだと思った時、二百メートルを泳ぎ終っていたのです。

前畑さんは、決して苦しい泳ぎをしたのではありません。心におちつきを持って泳いで、しかも二着という思いのほかのいい成績をあげたのでした。

その後

ロサンゼルス大会から帰ると、前畑さんはほっとして、もう専門学校の一年生でもあり、大会に出ることをやめるつもりでしたが、まわりの人々がゆるしません。



四年さきのオリンピックピックをめぐって、みんなにおしだされることになったのです。

それからまた、前畑さんのはげしい練習は続けられていったのです。泳ぎの形をどうするということよりも、さらに泳ぎの力を強くすることに深い考えをめぐらしました。

こうして、前畑さんの努力は、たえまなく続けられていきました。

オリンピック大会の終わった時、前畑さんは、

「わたくしの選手生活の間、最も苦しい試合でありましたが、自分の心の強さと努力によって、最もかがやかしい記録を残しました。」

と書いていますが、スポーツのかけにある精神の力を思わずにはいられません。

(四) 発表会

一 夏休みがすんで

長い夏休みがすんで、みんなはまっ黒に日やけた顔をにこにこさせながら、元氣よく登校します。

大谷川の上流で三日間のキャンプをした、まさお君の話。

水泳会で一等になり、すいかをもらった、あきら君の話。

ふなつりにいって、一日に三十ぴきもつった、道男君の話。

学校が始まってしばらくの間は、こうした楽しい夏休みの思い出話にあけくれます。

しかし、みんなにとって何より待たれるのは、毎年夏休みのあとで開かれる発表会です。ほかの人のおもしろい研究を聞くことも、自分の研究をみんなに聞いてもらえるのも、楽しみなものです。

それにことしは、先生が、

「この夏休みの研究は、みなさん自身でやってごらんなさい。四年生までは、どんなことを、どんなふうに研究したらいいかを話し合いましたが、もう五年生ですから研究の方法もわかっていると思います。研究する材料も、計画も、まとめ方も、みんな自分でやってごらんなさい。」
と、おっしゃっています。それだけに、どんな研究が発表されるかが楽しみなわけです。

いよいよよきようは、その発表会です。先生が、

「さあ、発表会をしようと思いますが、場所とか順序とかをどんなふうにしたらいいでしょうか。」

と、おっしゃいました。

まさお はじめに、発表会の場所を作ったらどうだろう。

すみ子 場所を作るといっても、どんな発表があるのかわからなければ、できないのじゃないでしょうか。

まさお それは、どうして。

すみ子 げきをするのでしたら、ぶたいを作らなければなりませんし、研究発表には、表をはる台などがいるでしょう。

道男 それでは、どんなものを発表するか話し合うことにしよう。

あちらこちらから、いつせいに手があがります。みんなが自分の発表するもののかつてに言い合つて、まとまりません。

まさお みんなが、自分の発表するものを紙に書いて、先生に見ていただく。先生 では、そうしなさい。集まったのを、先生が黒板にみんな書いてあげ

ますから、順序はみなさんできめなさい。

こんなことを話し合っているうちに、みんなは発表会の係がいることに気がつきました。いろいろな仕事を考え、それぞれの係をきめました。係の人が、順序をきめたり、プログラムを作ったり、ぶたいの用意をしたりします。

力を合わせていっしょうけんめいにしたので、発表会の用意は、すぐできあがりました。

はじめに、道男君の発表です。道男君は船のことを研究したのだそうです。

船の造り方とか、組み立てとか、速さとか、利用法とか、むかしの船と今の船のちがいなど、いろいろなことを調べたうち、じょう気船をはじめて発明したフルトンの話をしました。

それから、たかし君たちの「時」というよびかけや、礼子さんの「蚕のまゆ」の研究など、いろいろおもしろい発表がありました。

ニ クラーモント号のできるまで

1 二つ目玉の船

ニューヨーク市を流れるハドソン川の上流から、木材や石炭を山ほどつんで来た小さな船が、川岸でいかりをおろしました。仕事につかれた水夫たちが、どこにつくころは、あたりはすっかり暗くなって、ただふなばたを打つ波の音が、ときどき静けさを破るばかりでした。

と、ザーツ、ザーツ、ザーツ、ピューツ、ピューツと、へんな音が聞こえてきました。

目ざめやすい水夫たちがとび起きて、じつと耳をすまして聞くと、そのへんな音は、こちらへ近づいてくるようです。その音は、だんだん大きくなり、もうどんなねぼうでも目をさまさないではいられないほどになりました。

「あつ、へんなものが。」

「いったいなんだろう。」

「にげろ、にげろ。」

水夫たちは、すっかりおどろいてしまいました。それもそのはずです。まっくらやみの中に、へびのしたのような赤い火をふき出し、その両側に、ピカリピカリと光る二つの目玉を持った、大きなものが動いているではありませんか。

「あ、まものがぼくたちをくいに来たのだ。」
こう思った水夫たちは、ふるえあがつてしまいました。そして、もう、どうしていいの



かわからず、ただ船の中をうろろするばかりでした。

気の早いわかい者たちはボートに乗ってにげる。

女たちは船底にはいつて、頭から毛布をかぶる。

ある者は、ひざまずいておいのりをする。

こんなことで、船の中はそれこそたいへんなさわぎになってしまいました。

ところが、この赤い火をはき、光った二つ目玉のへんなものは、そんなおそろしいものではありません。

フルトンの発明したじょう気船クライモント号が、ハドソン川をさかのぼって試運転をしているのでした。

2 少年時代のゆめ

フルトンは千七百六十五年、アメリカのペンシルバニア州に生まれました。

フルトンの父は、かれが四才の時になくなりましたが、母のメリーは、女手ひとつでかれをりっぱに育てようと思いました。

小学校にはいったフルトンは、絵がたいへんじょうずでしたが、ほかの学科はあまりすきではありませんでした。数学の時間や読み方の時間は、いつもノートのみや、紙きれにまどから見える景色や、教室にかざつてある花を書いています。このようにあまり勉強をしなかったので、一年生で落第してしまいました。

母のメリーはひじょうに心配しましたが、りっぱな人だったので、

「おまえが大きくなったら、いい絵の先生につけてあげよう。だから、今のうちにほかのものもしっかり勉強しなさいね。絵を書くのには、数学も、読み方も必要なですよ。」

と、やさしく言い聞かせました。

フルトンはこのやさしい母の言葉に元気づいて、だんだん勉強するようになってきました。もともと、かしこいフルトンのことですから、勉強を始めると、どんな学科にもすばらしい力を出していききました。

フルトンのなかのよい友だちに、ガンプというかじ屋の子供がいました。フルトンはガンプといっしょに、鉄を切ったり、焼いたり、のばしたりして遊びました。

「こんどは鉄橋を造ろう。」

「あしたは鉄橋が自由に動くようにしよう。こんなことを話し合つては、いろいろなものを作つて喜んでいました。」

ある日のこと、フルトンはガンプの父に



連れられてつりに行きました。ところが、とちゅうで大風にあつてしまいました。ガンプの父はいっしょうけんめいに船をこぎましたが、波が高くてどうしても思うように進みません。

ガンプとフルトンは船が大きくゆれるたびに、ふなばたにしがみつぎ、ふるえていました。「もうだめだ、もうだめだ」と、なんど思ったか知れませんが、

それから、なん時間たつてからでしょうか、船はやつと島かげにはいることができました。ガンプの父はあれくるう波との戦いにつかれきつて、ものもいえないほどでした。

このことがあつてからフルトンは、

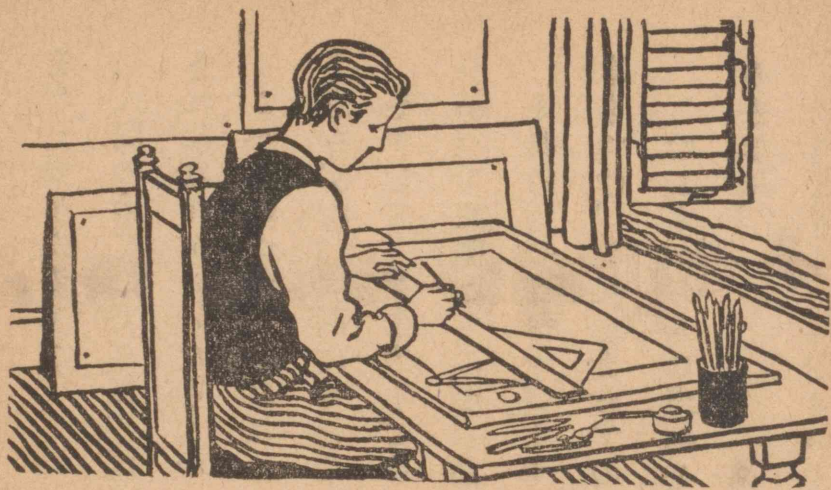
「ガンプのおとうさんのような、力の強い人が船をこいでも、少し風があると、とてもだめだ。もつと強い力で船を動かすことはできないものだろうか。」と、考えるようになりました。

3 画家から発明家に

フルトンの母は、かれが学校を出ると、やくそくどおりそのころの名高い画家、ウエストについて絵を習わせることにしました。

なにしろ、天分がある上に、すきなことでもあるので、二年もたたないうちに、一人前の絵かきになりました。それからさらに研究を深めるために、海をわたってロンドンへ行き、そこで絵の研究についての計画を立てました。研究を続けていくのには、まず生活がしつかりしていなければならぬ。そのためには、注文を取って絵を書こうと考えました。絵を書くことは自分の研究にもなるし、また、売ったお金でくらしも立てることができると思ったからです。

ところが、注文されて来るものは、建築や機械の設計図ばかりで、かれが考えていた絵の注文はありませんでした。一時はがっかりしてしまいましたが、それでもたのまれた仕事は、いっしょうけんめいにしました。機械の設計図な



どをたのまれると、自分でもけいなどを作り、改良すべき所は改良してあげるといふようにして、客が望んでいる以上のものを作りました。

そのために、ひょうばんは急によくなり、毎日注文がたくさん来るようになりました。こうなるど、かれは自分の絵の研究もわすれ、朝からばんまで、建築や機械の研究を続けました。

毎日毎日研究していると、はじめきらいであった仕事も、いつの間にかすきになるものです。

発明の方に頭が向いたフルトンは、ふと、少年時代のゆめを思い出しました。けむりをはいて走る船、機械の力で走る船——かれはしきりにそれ

を考え始めたのです。

「人間の方ではだめだ。ほの力でもだめだ。もつともつと強い力でなくては。それには何がいろいろか……。そうだ、ワットのじょう気機関だ。」

こう思いついたかれは、もう、じつとしてはいられません。はるばるとワットをたずね、機関についていろいろと教えを受けました。

そうして、その力をどのように使えばよいかということに苦心した末、三年かかって発明したのが、前にのべた汽船クラームント号なのです。

それは、長さ四十メートル、はば四メートルで、船の両側には大きな水かき車をつけ、これをまわすのに二十馬力の機関をつけたものでした。

このふうがわりな汽船をはじめて動かした日のようすを、フルトンは友人への手紙に、

「さあ、もう出発だというので、ぼくのだいじなお客はみんな、かんぱんにならびました。だれもかれも、めずらしいやら、おそろしいやらで、心配そうな顔をしています。中には、喜んで乗ったものの、こわくなってなきだしそういう顔をしている者もあります。

やがて合図があつて、船はゆつくり動きだしました。ザアーツ、ザアーツと水の音をたてて、船はゆれることもなく、どんどん進んで行きます。

みんなはほっとしました。そして、むちゆうになつて『ばんざい』をさげんだのです。

しかし、この中でだれよりもうれしかったのは、ぼくです。

と、書いています。

この短い手紙に、フルトンの喜びがあふれているではありませんか。

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
三年	二年	一年	三日	二日	一日	三時	二時	一時	三秒	二秒	一秒



三 よびかけ 時

出る人 1から12まで十二人（き数は男子、ぐう数は女子）

進行係

進行係の連れてくる小学生

小だいこの音でまくがあく。

十二人が半円形にならんで、小だいこの音に合わせて、両手を左右にふっている。時計のふりこのつもりである。

しばらくして、音はしだいに小さくなり、きえてしまう。手だけは動いている。

女全 十年
男全 百年
全 千年

「千年——」で、全員両手をそろえて大きく円をえがき……手をおろす。

- 1 一秒
- 2 一秒
- 3 時は流れる
- 4 話しているあいだも
- 5 考えているあいだも
- 6 歩いているあいだも

- 7 ねているあいだも
- 8 時は流れる
- 9 朝は 昼に
- 10 昼は 夜に
- 11 春は 夏に
- 12 秋は 冬に
- 女全 時は流れる
- 男全 時は流れる

また、はじめのように、そろって両手をふりはじめる——。
ぶたいのはしに、進行係が、人形をあかんぼうのようにあやしなから出
てくる。

進行係 みなさんにおたずねします。げんかんには、このあかちゃんをおわすれになった方はありませんか。赤いぼうしをかぶっておられます。おかあさんは、しきゅう受付までおいでください。

進行係去る。

みんな、まだ手をふり続けている——。

- 1 遊んでも
- 2 勉強しても
- 3 はたらいでも
- 4 なまけても

- 5 時計は進む
- 6 時は流れる
- 7 自分の時間は
- 8 自分で生かせ
- 全 自分で生かせ

両手をふりやめ、9だけを残して、みんなしゃがむ。

9 (ポケットからノートをとりだして、読む) 日曜日のぼくの日記
早く起きるつもりだったけれど、目をさましたら、もうみんな朝ごはんがすんでいた。ねえさんが、五回も起こしてくれたそうだけれど、ちつとも知らなかった。

朝のうち勉強をするつもりだったが、きのう、国ちゃんから借りた本を見ているうちに、ひる近くになってしまった。ひるから学校に行つて野球をした。六ちゃんのチームを八対五でやぶった。ぼくはセカンドをした。そのあとで、吉村君の家に遊びに行った。おかあさんには四時までに帰るといっておいたのに、五時すぎになったのでしかられた。夜、勉強しようと思っていたら、分家のおじさんがおいでになったので、みんなでかるたをした。あすの朝早く、勉強をするつもり――。

日記を読み終ると、みんな立ちあがる。

- 10 早く起きるつもりだったけれど……
- 11 勉強をするつもりだったけれど……

- 12 四時までに帰るつもりだったのに……
- 1 あすの朝早く起きて、勉強をするつもり……
- 2 なにをする、つもり……
- 3 かにをする、つもり……
- 4 弱いところに
- 5 時が流れる
- 6 時間が進む
- 7 自分の時間は
- 8 自分で 生かせ
- 全 / 自分で 生かせ

また、両手を動かかしはじめる。

ぶたいのはしに、進行係が、こんどは、赤いぼうしの、ランドセルをつけた小学生を連れて出てくる。

進行係 みなさんにおたずねします。げんかんにあかちゃんをおわすれになつた方はいませんか。もうこんなに大きくなつておられます。こころあたりのおかあさんは、しきゆう受付までおいでください。

進行係去る。

みんな、まだ手をふり続けている……。

1 集まれ 時間だ。

全 時間だ 集まれ。(といいながら、半円形をくずして、客の方に向かっ

て、ななめの線にならぶ)

1 汽車だ、時間だ、出発だ。

3 おや、ひとりたりない。

4 ひとりたりない。

6 日野さんがいないわ。

7 そうだ、日野君がいない。

9 集まる時間をわすれたんだらう。

2 ひとりがおくれて、

5 ぜんぶがおくれる。

全 おくれる、ぜんぶがおくれる。

1 汽車の時間にまにあわない。さあ、手わけしてさがすことにしよう。

8 だけをのこして、おもいおもいにぶたいの左右に去る。
8、ぶたいのまん中に進み出る。

8 わたしたちの会を三時にひらきます。時間を守ってお集まりください。
その声が終ると、1と2、もと半円形にいらんでいた位置に、かけ足で
帰ってくる。

8 時間になっても、まだふたりしか集まりません。はじめる時間をのば
します。

3、ぶたいのはしに出てくる。

8 三時五分。

3 なあんだ、たったふたりきりか——せつかく早く来たのに——（のろ
のろと、2の横にならぶ）

4、ぶたいのはしに出てくる。

4 ああよかった、わたし、おくれたかと思った——（と、3の横につく）

5、ぶたいのはしに出てくる。五人を見て、こそこそと後から4の横に
ならぶ。

5 (4に)まだ、はじまっていないなだね。なにしているんだらう、ほかの人は。——おや、来た来た——(ぶたいはしに出てきた6を見て)きみ、ちこくだよ。

6 ちこく。だってまだほかの人も来ていないでしょう。(どいいながら、5の横にならぶ)

5 みんな早くくればいいのに……あ、また来た。(ぶたいはしに来た7を見て)どうしたんだい。もう、三時二十分だよ。

7 おや、少しおくれたかな。(どいって、6の横につく)

8、7の横にならぶ。

9と10出てくる。

9 どうせ時間どおりには、はじまらないよ。

10 そうよ。だから、わたし——いつも少しおくれて行くことにしているのよ。

9と10、8の横に行く。

11、本を読みながら出てくる。10の横にならんでから、本をポケットにしまう。

12 出てくる。

12 (みんなを見て)あら、まだはじまっていないの。わたしにかまわないではじめればよかったのに——(どいいながら、11の横にならぶ)

8 では、みなさんがそろいましたから、わたしたちの会をはじめること

にします。ただいま四時です。

8の言葉が終ると、また、そろって手をふりはじめる。

- 1 ぼくにだいじな時間は
- 2 わたしにも だいじな時間
- 3 きみに ほしい時間は
- 4 あなたにも ほしい時間

そこへ、また、進行係が、めがねをかけたひげのしんしを連れてくる。
しんしは、かわのかばんをさげてソフトをかぶっている。

進行係 みなさんにおたずねします。げんかんにあかちゃんをおわすれにな
った方はありませんか。このとおりおとなになって受付で待っていていらっ
しゃいます。(しんし、ソフトをとってあいさつをする。ソフトの下は子
供用の赤いぼうし)

進行係としんし去る。

みんな、まだ手をふり続けている。

- 5 時は流れる
- 6 時間は進む
- 7 ひとりの上に

- 8 社会の上に
- 9 時は流れる
- 10 時間は進む
- 11 生かして 使え
- 12 時間の命
- 女全 時間の命
- 1 時は流れる
- 2 時間は進む
- 3 正しく 使え
- 4 時間はたから
- 男全 時間はたから



小だいがかなりはじめる。それにあわせて、6と7を中心に「V」の字をさかさにしたような形になる。(この時67はぶたいのおくにさがって) この形ができたら、最初の「一秒」「二秒」「三秒」にかえる。そして「A」の形は、客の方にむかって「I」の字形にたてに一列になる。

つぎの「一時」「二時」「三時」で、1を中心に男だけ動きはじめて、のこった女の列と直角になる位置まで進む。時計の長いはりが十五分のところまできたのである。男女の列は「L」の形になる。(この時1は足ぶみ、3はきざみ足……5は大またで——もし「一時」「二時」「三時」をいうだけでたりなければ、女が全部で、それをくり返してもよい。)

つぎの「一日」「二日」「三日」で、男の列は、1を先頭に左に進む。(1がいた所に5がくるまで) 形からいえば、前のぎやくで「J」形である。

つぎの「一年」「二年」「三年」で、6を中心に女の列が十五分のところ

まで進む。男の列と女の列がつづいて、「一」の字形に一直線になる。

「十年」「百年」「千年」で、最初の半円形にかえる。(この動きの間、とまっているものも、つねに小さきみに足ぶみしている。)

半円形にかえたら、両手をふりはじめる。そして、「千年」のつぎの「一秒」から、「時は流れる」までをくり返す。

それが終つて、進行係が、赤いぼうしにちゃんちゃんこ、つえをついたおじいさんを連れて出てくる。

進行係 みなさんにおたずねします。げんかんにあかちゃんをおわすれになつた方はありませんか。おあずかりしているうちに、おじいさんになつてしまわれました。ここらあたりのおかあさんは、しきゆう受付までおいでください。

進行係、よぼよぼのおじいさんの手をひいて去る。
みんな、手をふり続けている。

- 1 一秒がつみかさなつて 千年になる
 - 2 一秒がつみかさなつて 歴史になる
 - 3 その一秒が いまも流れている
- 女全 その一秒が いまも
男全 いまも その一秒が
全 流れている 流れている

小だいがなる。

みんなの動かす手で、しだいに早くなつてくる。まくがしまる。

「時」という「よびかけ」を出しました。よびかけはげきと同じようなものが、少しちがったところがあります。

ふつうのげきには、必ずどこで、いつ、だれがどうしたというまとまったすじがあります。

ところがよびかけには、げきに必要なまとまったすじがありません。すじがあることもありますが、なくてもいいのです。そのかわり、何をねらっているか、ねらいは、はっきりしています。そのねらいに向かって、言葉の力や美しさをくり出していくところに、よびかけのおもしろさがあるのです。

つぎに、げきは、必ずふたり以上の会話からなりたっています。げきでは、その話しあいが、事件を進め、すじをつくっていきます。

ところが、よびかけには、げきのようにはっきりした会話がありません。会話がある場合もありますが、なくてもいいのです。

早くいえば、みんながひとりごとをいっているようなものです。そのよびかけのねらいに向かって、ひとりひとりの言葉がなげつけられ、それがまとまって、ふくれあがって、ひとつの考えや、その場のようすになっていくのです。

さらに、げきに出る人には、必ず性格があらわれていますが、よびかけにははっきり出ていません。よびかけでは、ひとりひとりの性格よりも、作品全体の性格をだいにするので、そのために、服そうにしても、全部そろえて同じようにする場合が多いのです。

また、よびかけはえい画やラジオのように、いろいろな場面をとり入れることができます。ふつうのげきでは、まくがあいてからしまるまで、同じ場面でないところなのです。げきでできないことをしぜんに見せるところに、よびかけの、おもしろさがあるのです。その上、よびかけには、意味を強くしたり、調子をそろえるために、声を合わせていうところがあります。これをうまく生かすとよびかけの、はぎれがよくなり、力がわいてきます。

よびかけは、ちょっとみると、げきのようにでもあるし、げきともちがうともいえるのは、こうしたわけからです。しかし、いろいろな材料を、てがるにもりこんで、多くの人でできるところに、べつのおもしろさがあります。みなさんも、よびかけを作って、実際にやってみてごらん下さい。

四 蚕のまゆ

礼子さんは、夏休みにいなかへいき、そこで養蚕をしているのを見て、ふと、「蚕は、まゆをどのようにして作るのかしら。」

と思いました。そこで、まぶしにあがる蚕を二ひきいただいて、まゆの作り方を観察し、そこからおもしろいことを発見しました。

これは、礼子さんの観察記録です。

わたくしは、八月十六日に千葉のいなかへいききました。いなかの家では、おじいさんが蚕をかっていらつしやいました。

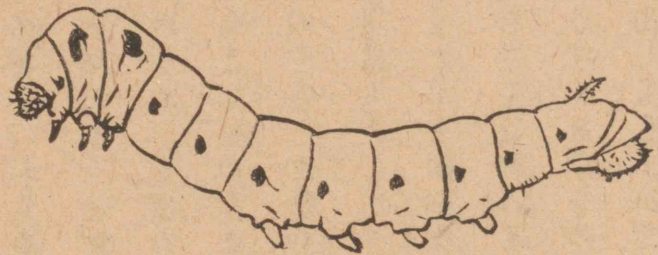
蚕は、八月二日にたまごからかえつたのだそうで、わたくしがいった時には、五列になっていて、もう三、四日すると、まぶしにあがるという時でした。

わたくしは、夏休みの研究に、蚕のことを調べようと思つて、お仕事のでつたいをしました。十日までは、一回くわの葉を食べるごとに、蚕は目に見えて大きくなっていきました。

ところが、十九日になると、もうくわの葉をやつても食べないで、葉の上にあがつたり、かごのまわりで頭を動かしている蚕がたくさん出てきました。そういう蚕をみんな拾つて、まぶしにあげました。

わたくしは、研究のためにおじいさんから、蚕を二ひきいただきました。

蚕は、うす黄色でうすくすき通つて、少しちぢ



まっています。

その蚕を、わらをいれたはこの中に入れてやりました。

その時はちょうど午前九時でした。

それから、しばらく見ていましたが、まゆを作ろうとはしないで、わらの間をあちこちと歩きまわっていました。

そのうち、ようやく場所がきまつたらしく、いつかしよにじつとして動かなくなりました。

「もうすぐまゆを作るわね。」

と、わたくしがいうと、おじいさんが、

「そうすぐまゆを作るものではないよ。からだの中のものを、ふんにしてみんな出してしまつてからでないよ、作らないのだよ。」

とおっしゃいました。その時は十時でした。そこでわたくしは、いとこたちと

遊びました。

おひるがすんで、わたくしは蚕を見ました。蚕はふんを二つしていました。

またあちこち動いています。

十二時半、蚕は糸を出して足場を作りはじめました。足場というのは、蚕が自分の近くにあるわらとわらとの間へ、糸をはっていくのです。

頭を左右にふりながら、細い糸を出しています。まゆになるのはたいへんだと思ひながら、また遊びました。

二時二十分に見ると、まだまゆの形はできていませんが、だんだん白くなつていきます。蚕はさつきの反対の向きになっていました。

二時四十分、また向きをかえて、前の方を作っています。

三時には、うしろ向きになって作っています。まゆの形がうすくできてきました。

わたくしは、蚕が前を向いたり、うしろを向いたり、かわるがわるやっているの、その間の時間をはかりながら、蚕のようすを調べました。それは、つぎの表の通りでした。

3時	30分	前後
	35	前後
	45	前後
	55	前後
4時	5分	前後
	15	前後
	25	前後
	35	前後
	45	前後
	55	前後
5時	5分	前後
	15	前後
	25	前
		夕食
7時	5分	前後
	15	後

七時五分に見たら、前を向いてさかんに糸を出し、まゆを作っていました。そして、十分たつて七時十五分になると、ちゃんとうしろを向きました。まゆはだいたい白くなってきました。

わたくしが、この調べによっておもしろいと思ったことは、蚕は、だいたい十分ごとに向きをかえて、まゆを作るということです。

前の方を向いて十分間、頭とむねを左右、上下、ななめにぐるぐるまわしながら、糸を出してまゆを作っていたかと思うと、こんどはすーっと頭を「お」の方へ持つてきて、今までと反対の向きになり、またさつきと同じようにして、まゆを作ります。

ちょうどむねが中心になり、口の先までが半径になって、くるくるむねをまわしながらまゆを作るから、あのようなまるい形のまゆができていくのです。

ただ、不思議でならないことは、ちょうど十分たつと、向きをかえることです。蚕は時計を見るわけではないのに、よくこんなに正確にできるものだと感心してしまいました。

このようにしてまゆを作るから、まゆの形が、両はしがまるく大きく、まん

中が細くなるのだと思いました。

二十日の朝見ると、まゆはまっ白になって、蚕はもう見えませんでした。その日、まゆを持って東京に帰りました。

二十七日に、一つのまゆからどのくらいの糸が取れるかと思って、おかあさんにまゆをにいていただいて、糸口をさがし出しました。

糸は少し力をいれすぎると、切れてしまいます。糸まきが小さいので、なかなかうまくまけません。

はじめたのは、一時半ごろでしたが、まき終ったのは五時半ごろでした。

糸まきに九千八百十二回まきました。

糸まき一回の長さが、だいたい九センチメートルですから、約九百メートルで、一ぴきの蚕が一キロ近い糸を出すことを知りました。

(五) 少年のころ

一 小さな画家

千七百三十八年、アメリカのペンシルバニア州のある町にひとりのあかちゃんが生まれました。

このあかちゃんを見て、おとうさんもおかあさんも、近所の人たちも、この子はいまに何かりっぱなことをしそうだと思いました。

「この子はきつと、世界でもめずらしいすぐれた人になる。」

というのが近所の人のおうわさでした。このあかちゃんの名は、ベンジャミン・ウエストというのでした。

ウエストが七つになるまでは、何も話をするようなこともなく過ぎました。

七つになったある夏の午後のことでした。

おかあさんは、ウエストの手にうちわを持たせ、ゆりかごの中でよくねているあかちゃんの顔にたかるはいを、追いはらうようにいいつけて、へやを出ていきました。

ウエストは、はいがあかちゃんの顔に近づいたびに、うちわで追いはらっていました。ゆりかごの中のアカちゃんは、むっちりとした両手を、あごの下にあてがって静かにねむっています。いかにも楽しそうな顔でした。

あかちゃんはきつと、天国のゆめでも見ているのでしょう。ウエストは、「ああ、なんとという美しいわらい顔だろう。こんなかわいい顔が、いつまでも続かないですぐ消えてしまうのは、ほんとうにおかしいことだ。」と、思いました。

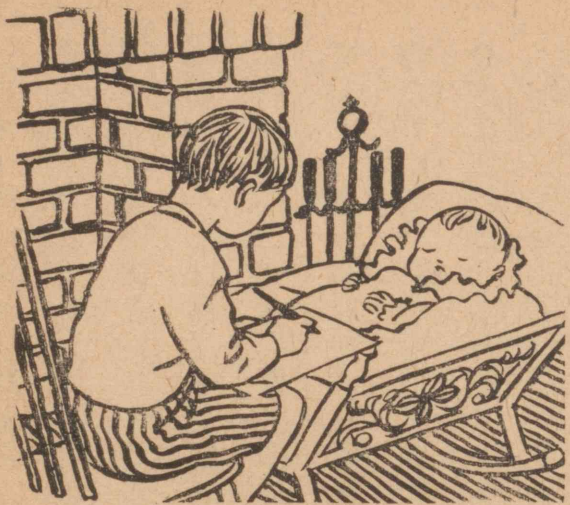
こういつた考えから、ウエストはふと、この美しいあかちゃんの顔を絵に書いて写しておくということに思いつきました。そこで、すぐにペンと紙をとって、ゆりかごのそばにひざをつき、あかちゃんの顔を書きはじめました。いつしようにけんめい書いていると、おかあさんの足音が近づいてきました。すると、ウエストは、急いで紙をかくそうとしました。

おかあさんは、ウエストがあわてたような顔をしているのを見て、

「何をしていたのでですか。」

とたずねました。

ウエストは、あかちゃんの顔を紙の上に写しとってしまったのは、何か悪いことのように思われたので、だまっていました。



けれども、おかあさんが、どうしても返事をするようにといわれるので、とうとうその絵をわたしてしまいました。そして、しかられるだろうと思って、頭をさげていました。ところが、どうでしょう。おかあさんは、

「まあ、これはサアリーちゃんの絵じゃないの。」

といって、たいへん喜びました。そして、ウエストをだいて、やさしく頭をなでてくださいました。サアリーちゃんというのは、あかちゃんの名前です。このことがあつてから、ウエストは、自分の書いた絵を、おかあさんに喜んで見せるようになりました。

ウエストは、だんだんと大きくなって、自然の色や形をながめることを喜ぶようになりました。

たとえば、春のすみれや、夏のばらや、秋のはじめのべに花などは、ウエストの大すきなものでした。秋も深くなって、森がきれいにいろどられてくると、朝からばんまで、じつとそれを見ていることが、ウエストには何よりうれしいことでした。

また、夕焼け空の金色の雲をながめるのも、楽しみの一つでした。ウエストは、チヨークで木や人や山や家やいろいろなものを書いて喜んでいました。

このころ、ペンシルバニア州には、まだ大勢の土人がすんでいました。ウエストのいる町にも時々土人が来ることがありました。ところで、この土人たちは、ウエストがたいへん気に入って、自分たちの顔にぬる、赤と黄色の絵具を分けてくれました。それにおかあさんからあいをいただいていたので、ウエストは、赤黄青の三原色を手に入れることができました。この三原色があれば、いろいろな色を出すことができるので、ウエストの喜びはたいへんなものでした。けれどもウエストは、まだ絵を書く筆を持っていません。というのは、ウ

エストのすんでいる町に筆は売っていなかったのです。

でも、ウエストはたいへんかしこい子でしたから、自分で筆をこしらえようと思いましたが。いったい、どんなにして筆を作ったのでしょうか。

ウエストは、どこからかねこの毛を集めてきて、それでりっぱな筆を作ったのです。そうして、この筆と絵具を使っていっしょうけんめいすきな絵を書きました。

ちようどそのころ、ウエストのおとうさんの所へ、友だちのペニントンさんという人がたずねてきました。

ペニントンさんが客間にはいると、そこには、美しい鳥や、森にさいている花などの絵がかざってあります。ペニントンさんはびっくりしてしまいました。そうして、大きな声でだれが書いたのかとたずねました。

すると、おとうさんは、

「ペニントン君、この絵はみんなわたしの子供が書いたのです。赤と青の絵具と、それからあいを使ってね。そして筆はねこの毛で作ったものです。それだけでこれを書いたのですよ。」

と話しました。これを聞いたペニントンさんは、

「それはたいしたものだ。あなたの子供さんは、ほんとにりっぱなうでを持っている。きっと画家になるために、この世に生まれて来たのだろう。」

こういって、ウエストの頭をなでました。ペニントンさんはウエストをほんとうにえらい子供だと思っっているようでした。ウエストのおとうさんも、おかあさんも、ウエストの絵がほめられたのを聞いて、近所の人たちが、

「いまにすぐれた人になるだろう。」
と、いった言葉を思い出しました。



ペニントンさんが帰ってから間もない、ある夕方のことでした。

ウエストの所へ小包がとどけられました。

「おや、これはなんだろう。だれがこんな大きな小包を送ってくれたのかしら。」

と、あけてみると、どうでしょう。

中には、たくさんの絵具と、いろいろな形の筆がはいっていました。それはみんな、ペニントンさんのおくり物だったのです。

そのほかにも、絵を書く時に使うカンパスが四、五まいあり、しかも美しい景色の絵もはいっていました。

小さな画家にとって、その夜はどんなにうれしい夜だったでしょう。ねる時間があると、ウエストはペニントンさんからもらった絵の道具を、まぐらの下において横になりましたが、どうしてもねむられません。ひとばんじゅうくらやみの中で、「あれを書こうか、これを書こうか」と考えていました。

朝になるとウエストは、急いで自分のへやにあがっていききました。そして、おひるの時間がくるまで、そこにとじこもっていました。おひるになっても、一口か二口食事をしただけで、すぐへやに引き返してしまいました。

そのつぎの日も、またそのつぎの日もいそがしそうでした。こうしたようすに、おかあさんは少し心配になり、何をしているのだろうと思って、ウエストのへやにあがっていききました。

入口の戸をあけてみると、ウエストはちょうど美しい絵に最後の筆をいれているところでした。

それはたいへんじょうずにできていて、草や木や水や空など、みんなそれぞれいい色がぬってありました。おかあさんは、

「まあ、ずいぶんじょうずに書けましたね。」

と、おどろいたような声を出しました。

その絵は、ほんとうにおかあさんがウエストをじまんにしてもよいくらい、じょうずに書けていたのです。筆の使い方も、まるで本職の画家のようでした。ずっと後になってから、この絵は、ロンドンの英国美術院というところに、かざられるようになりました。

やがてウエストは、フィラデルフィアの学校に行くことになりました。フィラデルフィアについて間もないことです。

ウエストは病気になって、少しばかり熱を出し、ねていなければならなくなりました。へやを明るくしておくで、病気によくないので、戸をしめて暗くしてしまいました。はじめは何も見えませんが、だんだんウエストの目は暗がりになれてきました。

ウエストはあおむけにねていましたが、とつぜんてんじょうに、静かに動いているうしのすがたが、ほんやり見えるではありませんか。ウエストはびっくりして目をこすって見ました。

「これは、どうしたわけなのだろう。」

と、不思議に思いました。

やがて、白いうしのすがたは見えなくなつて、こんどは、ぶたが五、六頭見えてきて、へやの暗がりの中に消えていきました。ウエストは、

「これは不思議だ。」

と、ひとりごとをいいました。

間もなく、ウエストのとまっている家の人々が来ましたので、この不思議な出来事を話しました。けれども、その家の人にはだれも、ウエストのいうことを信じませんでした。

「ウエスト君、暗いへやのてんじょうに白いうしや、ぶたが見えるなんてことはありませんよ。」

と、みんなはいいました。けれどもウエストは、自分の目を信じていましたので、こんな不思議なことがどうして起きるのか、そのわけを調べてみようと思いました。

そこで、家の人がいってしまつてひとりになると、起き出して、まどの戸を調べはじめました。ウエストは、その戸に小さなすきまのあいてあるのを見つけたしました。そのすきまを通して、光がはいってきて、てんじょうにあたつていたのでした。



さて、光学という光の学問をならうと、うしやぶたや、そのほか戸の外のいろいろな物のすがたは、そのすきまを通してはいつてきて、ウエストの頭の上に写るのであるということがわかるのですが、ウエストは、なぜそんなことが起こるのかというわけを、ひとりで発見したのでした。

ウエストはその発見をもとにして、あんなことというものをこしらえました。

このあんなばこは、ウエストが景色の絵を書く時に、たいへん役にたちました。

月日は流れ、ウエストはあいかわらず、絵を書き続けましたが、そのうち何か職業を選ばなければならぬ年ごろになりました。

おとうさんやおかあさんは、そのことで頭をなやましはじめました。

おとうさんの友だちには、実際に世の人のためになるような職業でなければならぬと、考える人もありました。

けれども、いったいウエストの絵は世の人のためになるでしょうか。そのことがはっきりわかりませんので、おとうさんやおかあさんは、近所の人たちに相談をしました。

いろいろと話し合った末、どんな仕事でもその人に合ったものがあるのだ、その人の長をのばしていくことが、結局、世の中のためになることだということになりました。

こうしてウエストは、画家になることにきまりました。そうして、おとうさ

んおかあさんといっしょにすんでいた家や、なつかしい森や小川、それに絵具をくれた土人などと別れて、ヨーロッパにわたりました。

ヨーロッパでは多くのりっぱな人たちに親切にされましたが、かれはいつもまじめなかざりけのない気持をなくさずにいました。

ウエストは二十五才の時にロンドンへいき、そこで画家としてくらすことになりました。

ウエストのひょうばんは、だんだんと高くなり、とうとうジョージ三世という王さまのおつきの画家となり、英国美術院の院長になりました。

ウエストは、みんなからうやまわれて静かにくらし、千八百二十年に八十二才でなくなりました。

二 少年ニュートン

(一)



風もないのに、ぽとりと地上に落ちた一つのりんご。

それをながめて、いままでの研究をさらにおし進め、地球の引力について大きな発見をした大科学者、サア・アイザック・ニュートンは、千六百四十二年のクリスマスの日、イギリスの小さな村に生まれました。

このあかちゃんを見た時には、ニュートンのおかあさんも、この子がやがて世の人をおどろかすような、りっぱな学者になるだろうなどは、まったく考えていませんでした。

小さいころのニュートンは、勉強はあまりできるといふ方ではありませんでしたが、いろいろな機械を使うことは目だつてじょうずでした。

さまざまな形をしたのこぎりや、道具を自分で作って持っていました。そして、それを使ってはめずらしい物をくふうして作りました。

そのできばえのりっぱなものには、近所の人々もすっかり感心していました。ニュートンのおばあさんも、

「うちのニュートンは、いまにいい職人になりますよ。」
と、喜んでいました。おばあさんに

「ニュートン君は、機械を作ることがじょうずだから、時計屋になったらどうだろう。」

などといって、すすめたものもありました。

そう考えるのも、もつともなこと、ニュートンはそのころ、水時計をこしらえていたのです。

この水時計は、ニュートンが世話になっていた家の主人、クラクルという人にもらったはこで、作ったものでした。高さもはばも約一メートル二十センチの大ききで、そのころふつうに使われていた時計に、にたものでした。時計板のしるしは、したたり落ちる水のはたらきで、上がり下がりするようになっていたということでした。

ニュートンは、この水時計のほかに、日時計も作りました。これは、庭にうつる太陽のかけから思いついたものでした。

だから、ニュートンは時間を知るのに、ちつともこまりませんでした。日なたでは日時計を見るし、日かげでは水時計を見ればよかったです。

(二)

ニュートンは、やさしい方法でものを知ることが、たいへんじょうずでした。たとえば、風の力を知るのに、どうしたと思えますか。あの目に見えない、かわりやすい風の力をどうしてはかったのでしょうか。

ニュートンは風に向かって、はばとびをしたのです。そして、とんだ長さによって、そよ風だとか、とつ風だとか、あらしたとかを見分けることができたのです。

このように、ゆうぎをしながらも、いつもいろいろなむずかしいことを知ろうとしていたのです。

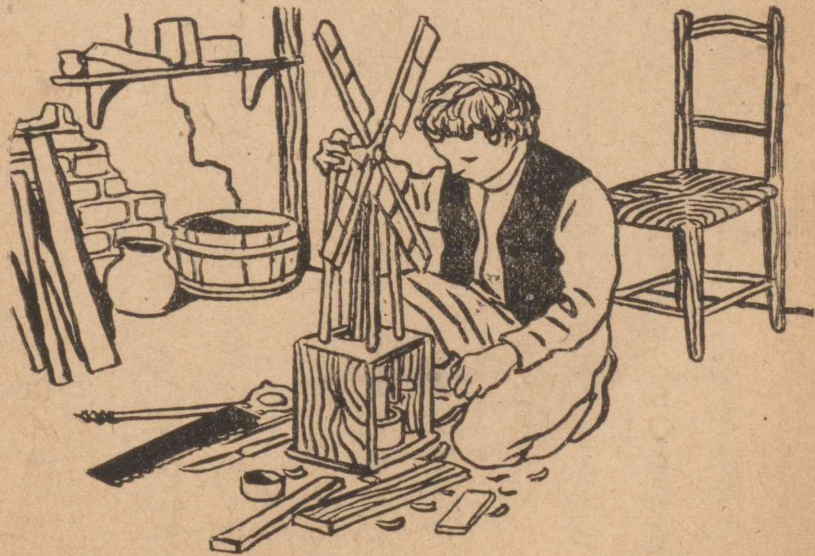
こういうおもしろい話があります。おばあさんの家の近くに、風車を使っている、粉ひき小屋がありました。ニュートンは、たんねんにこの風車小屋を調

べはじめたのです。

風車がとまっている時には、中の機械をのぞいて調べ、風車がまわっている時には、こくもつがどんなにして粉になるかを、じつと見守っていました。そして、その組み立てをすっかりのみこんでしまうと、こんどは自分の道具を持ち出して、たいへんいそがしく働きはじめました。

それから間もなく、近所の人たちは、ニュートンが何をしていたかを知りました。

ニュートンは風車小屋のもけいを作ったのです。



そのもけいは、小さなものでしたが、風車小屋も、中の機械も、ほんもののようにできていました。

風のふくところへおくと、風車はくるくるとまわります。ちよつと息をふきかけても、すぐ動きだすほどでした。

そして、何よりもめずらしいことには、はこの中に小麦を入れると、それがたちまち雪のような白い粉になってしまうのです。

ニュートンのお友だちは、この新しい風車小屋が、すっかり気に入ってしまいました。だれも、いままでにこんなすばらしいものを見たことがなかったのです。ところが、そのうちのひとりが、

「しかし、ニュートン君。風車小屋についているもので、だいじなものをわすれているではありませんか。」
と、いいました。

ニュートンは、風車小屋の上から下まででいいいに調べてみましたが、何もわすれているようなものはありません。それで、
「さあ、気がつかないが、いったい何ですか。」
とたずねました。

「ほら、粉ひきのおじさんは、どこにいるのさ。」

「ああ、なるほど。粉ひきのおじさんをさがさなければいけないね。」

そういうとニュートンは、どうしたら粉ひきのおじさんを見つけることができるかを考えはじめました。

人形を作つて、おじさんのかわりにするのは、やさしいことですが、人形では、動きまわつて粉屋の仕事をすることができません。

ニュートンはすっかりこまつてしまいました。ところが、ちょうどその時、そばにあったねずみとりに、ねずみがかかりました。ニュートンは、それをじ

つと見ていましたが、

「うん。これだ、これだ。」

といつて、ひざを打ちました。ねずみを粉ひきのおじさんにするのを思いついたのです。

そこでニュートンは、ねずみが車をふんで、しぜんに風車がまわるようにしました。ところが、ねずみは、ニュートンの思うように車をまわしません。

車は前に進んだかと思うと、後にさがり、少しまわしてはやめてしまいます。それからニュートンは、いろいろに考えたすえ、ねずみの前に食物をおくことにしました。

ねずみがそれを食べようと、たえず前に進むことを利用して、車がいつも前に進むようにしたわけです。

それからだんだん大きくなるにつれて、ニュートンは小さな風車小屋のようなおもちゃを作るよりも、もつとたいせつなことを考えるようになりました。

ひるまひとりている時などは、何かじつと考えこんでいるか、数学などの勉強をしていました。だから、友だちといっしょに外に出て遊ぶようなことはありませんでした。けれども、科学的な遊びは、たいへん好きでした。

たとえば、ニュートンはたこをあげることを、学校じゅうにはやらせました。そして、たこの形や大きさ、たて横のわりあいなどについて研究をしたり、糸の数のきめ方などを考えたりしました。

ニュートンはまた、ランプを作りました。冬の朝早く、まだうす暗いうちに学校にいく時など、このランプをさげていきました。

時には、一つのたこに、いくつものラン

プをつけてとばし、

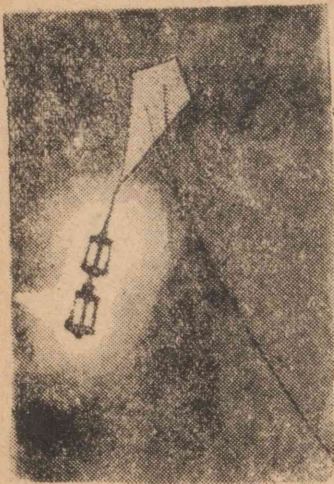
「ほうき星が見えるよ。」

などといって、みんなをおどろかせたこともありました。

ニュートンの家には、何人かの少女がいつしよにすんでいました。ニュートンはいつも、この少女たちとなかよくしました。少女たちのために小さなテーブルや、ままごとの道具などを作ってあげたり

していました。

ニュートンはまた、絵がすきでした。すぐれた絵を見ると、それをまねて書いたり、伝記などを讀むと、そのしよ像を書いたりしました。



その中には、学者や校長先生のしよ像などもありました。ニュートンは、これらの絵を自分のへやにかざって楽しんでいました。

また、詩を作ることも好きでした。ある時、名高い王さまのしよ像を見て詩を作りました。その詩は、

「科学者として、自分はこの地球の王さまのようになりたい。そのためには、どんなに苦しいことがあっても、喜んでそれをむかえいれよう。」
というような意味のものでした。

このように、ニュートンはいろいろなことをしましたが、なんといっても、機械の研究や、それを実際に作ることへの興味がいちばん強いものでありました。

(四)

ニュートンが十四才になった時、おかあさんは学校をやめて、家の仕事のでつだいをしてもらいたいといいました。ニュートンはいわれた通り、田や畑に出ていっしょうけんめい働きました。

しかし、働いている間も機械の研究をわすれませんでした。少しのひまを見つけては、勉強し考え続けていきました。こうしたすがたを見て、おかあさんはニュートンをもとの学校に返してやりました。

十八才の時、ケンブリッジ大学にはいりました。そこでニュートンは、星の学問のもとになる数学の勉強をしました。

りんごの落ちるのを見て、引力というものを発見したという話は、みなさんもよく知っていることでしょう。

ニュートンがこの引力のことを考えるようになった時には、いろいろな星がどのようなして空を通過していくかを調べようと考えていました。

毎夜高いところの上に登っては、望遠鏡で空をながめて研究をしました。そして、まるで自分が星の間に登って行って、星の通り道を歩いて見たかのように、すっかり調べあげました。

このような研究をしている間は、ニュートンの心は、この世の中のことよりはるかに高いところにあつたのでしよう。ニュートンのいろいろな研究を考えてみると、その一生の大部分は、遠くはなれた太陽や、星や月の世界で送つたともいえるほどです。

みなさんは、ニュートンとダイヤモンドという小さいぬの話を知っているでしようか。

ある日のことです。ニュートンは自分のへやに小さいぬのダイヤモンドを残して外に出ていきました。

ダイヤモンドは、下にねていましたが、ニュートンが出て行ってしまつて、テーブルの上にとびあがり、燃えているろうそくをたおしてしまいました。

テーブルの上には、ニュートンが長い間かかつて研究した、だいじなげんこゝうがたくさん積んであつたのです。

ろうそくの火は、たちまちげんこゝうに燃え移りました。そして、あつという間に、はいになつてしまいました。

ニュートンの血の出るような苦心は、あとかたもなく消えてしまいました。

ちやうどその時、ニュートンが帰ってきました。へやの戸を開けて見ると、だいじなげんこゝうは、わずかばかりのはいになっていました。

そして、そこにはいたずらもののダイヤモンドが、きよとんとした顔をして立っています。

ほかの人だったら、すぐにもいぬを殺してしまつたでしょう。

けれどもニュートンは、心の中では、大へん悲しく思いましたが、いつものようにやさしくいぬの頭をなでてやり、

「おお、ダイヤモンド、ダイヤモンド。おまえには、自分のしたいたずらがどんなことか、わからないのだね。」
といました。

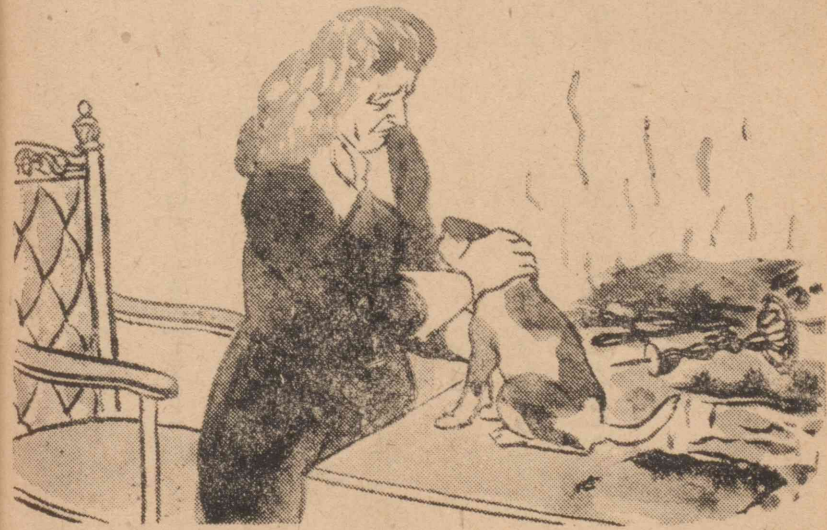
このことがあつてからしばらくの間、ニュートンは元気がなくなり、からだの調子も悪くなつてしまいました。しかし、小い

ぬに対する行いから、ニュートンがどんなにやさしい心を持っていたかがわかるでしよう。

ニュートンは、やがて元気になり、たいへん長生きをして、科学者としても有名になりました。有名になつてからも、少しも高ぶることもなく、ますます研究にはげんでいきました。

わたしは、海岸でめずらしい貝や、美しい小石を拾つて遊んでいる子供のようなものです。わたしの前には、まだ発見されないものが、たくさん横たわつていゝのです。

と、いったということですが、この言葉はニュートンの気持を、ほんとうによくあらわしているということができましよう。





お仕事の手びき

(一) 新しい力

1、大地、春のさきがけ、新しい力の三つは、文の形の上からも、ねらいの上からもそれぞれちがっています。そのちがったものが「新しい力」として結びつけられているのはなぜでしょうか。

2 「太陽の下に」と「麦」の詩を読んで、その感じはどんなにちがいますか。

○「太陽の下に」の中で、春らしい感じの出ている言葉をあげなさい。

○「麦」の詩には、作者のどんな気持ちがあらわれていると思いますか。

○「麦」の詩のつぎの言葉を説明しなさい。

○「三光鳥を聞く」も春のようすを写した文ですが「第一の花」での写し方とはちがっています。この二つを比べてみると、作者の考え方のちがいや、生活のちがいがわかりませんか。こうしたことに目をつけて文を読むことがたいせつです。

4 「新しい力」で作者のいおうとしているのは、つぎのどれですか。

イ いろいろな草や木が芽を出しているのは春が来たからである。

ロ すいせんのくきが長くのびている。

ハ すいせんほりはおもしろいものである。

ニ 去年の秋なくしたボールをみつめた。

ホ すいせんがぐんぐんのびて来た力はわれわれの中にもあるということ。

へ だれでも自分の力を信じて、のびていくことがたいせつであること。

麦はゆたかに村をつつんでいく。
おお、いちめんの麦、太陽の麦。
かれらの道中の楽しさよ。

3 「春のさきがけ」で「第一の花」と「三光鳥を聞く」では文の結び方がちがっています。「第一の花」のような文を口語敬体といひ、「三光鳥を聞く」のような文を口語常体といひてみます。どんなにちがっているか研究してみなさい。

○「第一の花」で、作者はどんなところに春の美しさを感じているのでしょうか。

○「第一の花」に書かれていることから、この土地はつぎのどれだと思えますか。

海に面したあたなかい地方

北海道のように急に春の来る地方

山にかこまれたわりあい寒い地方

一年中雪にとじこめられている地方

5 文の種類を大きく分けると、景色やものごとのようすを書いたじよ景文と、自分の感じたことや考えを主にして書いたじよ情文とにすることもできます。「新しい力」はこのうち、どちらにはいるでしょうか。「春のさきがけ」の二つの文はどちらですか。

6 春の自然を詩や和歌やいろいろな形の文で書きあらわしてみなさい。どんな形にあらわすにしても、目をみひらき、耳をすまして、春のようすをしっかりと感じとり、それをすなおに出すことがたいじなことです。

7 自分たちの作った作品をもとにして、「新しい力」とくらべながら、話し合いをしてみましよう。五年生としての国語学習の計画がたてられたら結構です。

(二) 心と心

1 「心と心」のところを読んで、つぎのこと

を研究しましょう。

○ つぎのらんに、いと思う答を書きいれな
る。

先生へ	手紙を出した人	手紙を受けた人	返事か、初めの手紙か
わたしのすむ町			
小さな研究報告			
日記のたより			

○ ここには、手紙が四つのせてありますが、
どうして「心と心」という題がつけてあるの
でしょう。

○ それぞれの手紙をくらべてみましょう。

(イ) にているところ。

(ロ) ちがっているところ。

2 「先生へ」のところを読んで、つぎのことを
調べましょう。

5 「日記のたより」は自分の日記でいろいろな
ようすを伝えようとしているのです。しかも、
この日記はふつうの日記とちがったところが
あります。日記はいつもきまったような形で
書くばかりがいいのではなく、この日記のよ
うに、いろいろな形で書くとおもしろいもの
です。ここにはいくつかの方法があげられて
いますが、つぎのようなことも考えられまし
ょう。

○ 見たり聞いたりしたことを絵に書いておく。

○ 新聞や、ぎっしの切りぬきをはりつけてお
く。

○ げきやシナリオのような形で書く。

○ 図表などで、いろいろなことがわかるよう
に書く。

○ うた日記のようなものをくふうする。

6 四つの手紙は、小さな町、大きな町、農村、

○ この手紙にはどんなことが書かれています
か。それを拾い出してごらん下さい。

○ この手紙には、手紙を出した人のどんな気
持が表われていますか。また、それはどんな
ところでわかりますか。

3 「わたくしのすむ町」を読んで、つぎのこと
を考えてみましょう。

○ 「わたくしのすむ町」は大きい町であるとい
うことが、どんなところでわかりますか。

○ 「いつまでたってもげんこうが集まらない。
いつもきまった人のげんこうがのせてある。
一部の人がかかってに編集をする。」というこ
は、なぜなかよくしたといえないのでしょうか。

そのわけをみんなで討議下さい。

4 「小さな研究報告」は、たいへんおもしろい
手紙だと思えます。それはどんなところです
か。

漁村のようすをあらわしていますが、どの手
紙がどんな所をあらわしたのかわかりますか。
また、それぞれの町や村はどんなところがち
がっていますか。自分たちの村や町とくらべ
て研究してみ下さい。

7 自分の住んでいる町や村のことを人にしら
せる手紙を書いてみましょう。

8 このごろのようすを手紙に書いて、しんる
いやお友だちに送りましょう。

9 はがきや、ふうとうの書き方には一つのき
まりがあります。それを調べてごらん下さい。

(三) スポーツ
1 「ドッジボール大会」のところで、つぎの間
題がわかりますか。

○ 作者はだれでしょう。なん年生ぐらいで、
それを思わせる言葉はどれですか。

○ 作者の組はどここの組と試合をしましたか。

か。

○ 試合をする相手がちがった場合、表わし方が同じにならぬよう作者の苦心しているところがあります。どんなところかわかりますか。

○ 作者の組がゆう勝したわけを文の中からさがしてごらんなさい。

2 「かがやかしい記録」のところで、つぎのことを研究してごらんなさい。

前畑さんの苦心の表われているのはどんなところか。それがどんな言葉で表わされているか。

○ この文は何をいおうとしているのか。

○ 周囲の人がどんなにして前畑さんを育てようとしているか。

3 「スポーツ」のところから、われわれはどんなことを学ぶことができるでしょうか。みんなで話し合ってみなさい。

○ つぎのいいと思うものに○をつけ、その理由も説明しなさい。

フルトンがじょう汽船を發明することができたのは、

・母がえらかったから。

・つりにいって大風にあったから。

・ワットの教を受けて、いっしょうけんめい研究したから。

・ガンブと友だちだったから。

3 どんな小さな發明も發見も、熱心とまじめさがなければできません。發明發見をした人の伝記や、どんなにして研究をしたかを調べみなさい。

4 「時」というよびかけは、いろいろなおもしろい問題をふくんでいます。つぎのことを手がかりとして考えてみましょう。

○ このよびかけを突えんするには、どんなこ

4 スポーツにいちばん大切なことは、スポーツマンシップを持つということです。スポーツマンシップといふのは、自分が最善をつくすと同時に、相手に最善をつくさせるということです。実際には、どんなにしたらいいかを考えてみましょう。

5 自分たちのやったスポーツについて、文を書いてみましょう。記録や成績などを文に入れる時には、どんなにしたらいいかくふうしてごらんなさい。

(四) 発表会

1 「夏休みがすんで」のところで話し合ったことをまとめて書きなさい。

2 「クラーモント号のできるまで」について、つぎのことを研究しましょう。

○ フルトンのえらいところはどんな点ですか、それがどんなふうにかかれてありますか。

とに気をつけたらよいか。

○ このよびかけでいちばんむずかしいところはどこか。

○ 言葉と動作をどのように結びつけたらいいか。

○ このよびかけがねらっているのは、どんなことか。

○ 「時」を自分はどう考えるか。

○ このよびかけのいいところはどこか。

5 よびかけはげきの一種ですが、無言げき(パントマイム)というのがあります。これは動作や表情だけで、あるものを表わします。これを研究して、よびかけに利用すると、よびかけはおもしろいものとなりましょう。

6 「蚕のまゆ」は研究記録です。

○ この記録のすぐれているのはどんなところですか。

○ この記録には、作者のどんな気持、たいどがあらわれていますか。

○ このような記録を書く時には、どんな点に気をつけて書いたらいいのでしょうか。この記録には、それがどんなところにあらわれていますか。

7 自分たちも、いろいろな観察や実験の記録を書いてみましょう。

(五) 少年のころ

○ 文を読むのには、いろいろな読み方があります。

1 声を出して読むか、だまって読むか。

2 文字だけをたどって読むか、心をとめて考えながら深く読むか。

五年生としては、声を出さずに早く読めることがたいせつですが、さらに、書いてあることがらを考えながら読むことがたいじです。

あなたの心を、最も強くうった、ふたりの行い、言葉を書き出しなさい。

他のすぐれた人々の伝記を、どんどん読んで、みんなと話し合いましょう。

(六) 全体を通してつぎのようなことを研究してみましよう。

1 この本には外国から来たことば（キャンプ、ノート、スポーツ等）がたくさん出ています。それらをあつめてごらんください。そして、どんな場合に外来語が使われているかを調べてみましょう。

2 文にはいろいろな形のものがあります。

イ 物語や童話のようなもの。

ロ げきやよびかけのようなもの。

ハ 詩や和歌はい句のようなもの。

ニ 記録や感想を書いたもの。

どの文がどれにはいるか研究しましょう。そ

そのために、読む間に心に残ったことを記録することは、いいことです。

二度三度と読む間に、新しく気づいたことを書きそえていくうちに、自分の読み方の深まっていくことがわかるでしょう。

○ 「小さな画家」と「少年ニュートン」を読んだの感想を、それぞれ書きなさい。

二つの感想を比べてごらんください。それから、二つの物語が「少年のころ」という単元をつくっていることがわかるでしょう。

ふたりの人は、いずれも世界に名高い人ですが、一方は画家、一方は科学者です。しかし、ふたりの間には、家のこと、性格、心がまえなどで、とてもよく似たところがあります。

それを考えていくことは、とてもたいせつな仕事です。ノートに記録してごらんください。

して、それぞれの文のちがいをいろいろな点から調べなさい。どんな内容を表わす時、どんな形の文がいいかも考えてごらんください。

3 つぎの文の「ゆく」という言葉を考えてみましょう。

石田君が遊びにゆこうといって、さそってくれたが、勉強がすまなかったので、ゆかなかった。母もゆけばいいのにとおっしゃったし、自分もゆきたかったけれども、勉強をやめてまでゆく気にはなれなかった。

「ゆか」「ゆき」「ゆく」「ゆけ」「ゆこ」を見ると、下の「か」「き」「く」「け」「こ」がかわっている。このように言葉のしまいが動く言葉があります。本の中から、こんな動く言葉さがして、どんな動き方をしているか調べてみなさい。

「ゆきます」「ゆきたい」とはいうが、

「ゆかます」「ゆかたい」とはいえないことも
わかりますか。

しょう。

4 「深い」「遠い」「あかい」などのように言葉の
しまいが「い」になっているものがあります。
本の中から、こんな言葉を拾い出して、それ
がどんな場合に使われているかを研究してみ
ましょう。

5 3と4では一つの言葉について研究したの
ですが、それについて、つぎのようなことも
調べてみるとおもしろいと思います。

○「き」「め」「て」などのように一つの音で一つ
の言葉になっているもの、「はな」「し」「あ
さ」などのように、二つの音で一つの言葉に
なっているもの、「うしろ」「すみれ」などのよ
うに三つの音で一つの言葉になっているもの
にはどんなものがあるだろうか。四つ、五つ、
それ以上の音の言葉にはどんなものがあるで

新しく出た言葉

あい	117	いたちそう	11	えのぐ	117	がいろじゆ	35
あおごけ	9	いちめん	34	えはがき	35	かえで	16
あかちゃん	88	いちぶ	34	えはがき	35	かがくてき	136
あぐりあみ	40	いとこ	108	おうえん	53	かがやかしい	57
あこがれ	63	いとまき	112	おうふく	65	かが	80
あしば	109	いとぐち	112	おおたにがわ	70	かご	107
あしぶみ	64	いぬかき	58	おおさか	26	かざりけ	127
アスファルト	32	いらいら	67	おおきか	32	かすむ	44
あつけなく	61	いりくんで(いりくむ)	38	おくりもの	120	かたず	60
あてがって	114	いろづいた(いろづく)	48	おじて(おじける)	54	かつき	42
あてな	30	いんりよく	128	おもい	25	がつか	77
あびながら	16	いんちよう	127	オリンピック	69	からりと	43
あらゆる	24	うけつけ	88	おんなで	77	かれ	7
あんばこ	125	うちわ	114	かい	64	かれない	32
いむら	58	うっかり	59	かいがん	38	カンバス	120
いがい	18	えいこくびじゆつじん	122	かいかつ	6	がんばれ	61
いしかわ	55			かいわ	104	ガンブ	78

しゃかい	100	すいすい	50	せんたく	41	ダイヤモンド	140
シャベル	17	すいせん	18	センター	51	たいりょう	42
じゅうがた	58	すいめん	33	センチ	18	たえ(たえる)	8
じゅうもんじ	29	すいせいせん	42	ぜんべいじよし	60	たかぶる	143
じゅくして(じゅくす)	7	すうがく	77	すいえいたいかい	68	たかる	114
じょかくせい	58	セーター	17	せんもんがっこう	54	たけがき	12
ジョージさんせい	127	すき	55	ぜんりょく	68	たけのこ	16
しょくにん	129	すこやか	6	そで	54	ただ	35
しょくもつ	135	スタート	62	そで	54	たつた	95
しょうじょ	137	すなほこり	12	そうぞう	43	たつた	43
しょうぞう	138	スポーン	51	そま(そま)	50	たてもの	31
しょうてんがい	84	すみっこ	5	そま(そま)	22	たなながみ	25
しょうきせん	73	すみれ	15	そびえる	31	たまらない	23
しょうねん	81			そよかせ	131	ターン	64
しんこうがかり	84	せいかく	105	ソフト	99	ちかてつ	32
しんこぎゅう	15	せいしん	69	ソフトボール	28	ちこく	96
しんし	98	せいちょう	36			ちちいろ	10
しんりょく	47	せいび	64			ちゃんちゃんこ	102
しんぼう	21	セカンド	90	たい	41		
		ぜひ	66	たい	28		

きりすいどう	57	くさぶき	38	こうたい	52	サアリー	116
きかい	129	くずして(くずす)	92	こうちようせんせい	25	さえずり	50
きかん	82	クレーメントこう	74	こうばい	12	さきがけ	9
きすう	84	くらがり	123	こうはんせん	52	さくせん	54
きせつ	5	クラクル	130	こうやさん	57	ささやいて(ささやく)	33
きのかわ	57	グラランド	17	こえて(こえる)	20	さすが	64
きやくま	118	くるい	59	こえふとり	4	さば	41
キャンプ	70	くろろ	44	(こえふとる)		さんこうちよう	12
きやく	52	くろずんだ(くろずむ)	13	こぎざみ	102		
きゆうこん	21	くわ	107	こくぐら	5	しうんてん	76
ギューギュー	14	くわえて(くわえる)	85	こくもつ	5	じしん	67
フイーチーホイホイ	58			こころあたり	92	した	75
きょうそう	37	けいかく	71	こしらえる	16	したしんで(したしむ)	7
ぎょそん	112	げきせん	56	こすえ	180	したたる	130
キロ	57	ゲラチー	61	こつつみ	120	じつさい	126
きろく	75	けっしょう	53	こっけい	23	しほう	82
くいに(くう)	84	ケンブリッジ	139	こなひきごや	181	しまかげ	79
ぐうすう	49	げんしよく	117	コロコロ	12	しみとおる	47
くくく	75	こうがい	81	こわれて(こわれる)	59	しめり(しめる)	10
		こうがく	125	コンクリート	12	しゃくなげ	4

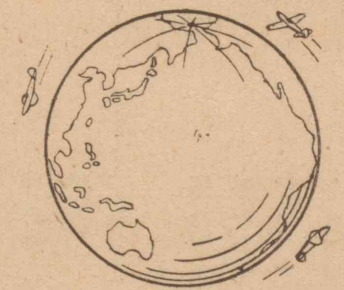
ひかえしつ	61	ふえて(ふえる)	52	ほうこく	37	みおぼえ	30
ひかけ	130	ふくそう	105	ほうさく	45	みごと	14
ひがん	10	ぶた	123	ほがらか	6	みずみずしく	6
ひげ	98	ぶな	10	ポケット	89	(みずみずしい)	6
ひげめ	64	ふもと	57	ほととぎす	29	みなぎって	24
ひざまづいて	76	プラタナス	33	ほんしょく	122	みのり	45
(ひざまづく)	76	フルトン	73	ほんにん	59	みやこ	31
ひそめて(ひそめる)	49	フレ	52	ほんもの	133	むぎこぎ	45
ひととき	33	ぶん	108	ポート	33	むぎまき	45
ひなた	130	ぶんけ	90	まえはた	57	むぎふみ	45
ひの	49	ブル	58	まぎれこんだ	21	むっちり	114
ひましに	35	べつとり	44	まごつかせる	59		
ひやけ	70	べにばな	116	まぎまぎ	30	めぎめた(めぎめる)	4
ひょうばん	127	ペニントン	118	まぢかねる	66	めだま	74
ひらおよぎ	58	へび	75	まねかれた(まねく)	60	メリー	77
ひるま	41	ペン	115	ままごと	137		
ヒューツ	15	ペンジャミン	113	まぶし	106	もうふ	76
フィラデルフィヤ	122	ウエスト	76	まんぞく	48	もけい	132
ふうしゃ	131						

ちゅうしん	36	てんごく	114	のうさくぶつ	39	はんせい	65
ちょうし	48	てんにん	26	ねらい	104	はんけい	111
ちよこつと	23	てんにゆう	63	ねぞこ	134	はるさめ	9
ちよつかく	101	とう	140	ねぎ	20	はるか	140
ちよつびり	22	とうきよう	60	ねごと	65	はりつめた	61
チヨーク	117	とうぎ	27	ねぎ	20	はまでら	58
チム	90	とうこう	70	ぬつと	34	はばとび	131
ついで	25	とうだん	16	ぬきがぎ	48	はば	40
つつましい	24	とうちゆう	7	ぬき	62	ハドソンがわ	74
つまさき	66	とくちゆう	126	ぬき	43	バット	17
つみあげられて	19	とけい	59	ぬき	34	はつと	26
(つみあげられる)	19	とげとげた	12	ぬき	48	はげんで(はげむ)	92
つばめ	50	とつふう	131	ねざこ	20	はし	30
つぼみ	9	とびきり	14	ねらみ	104	はくしゅ	51
てつきよう	78	(とりまく)	40	のうさくぶつ	39	はぎれ	105
デニス	68	どりよく	21			はみこんで	129
デバート	32					ノート	89
てわけ	93					のうそん	39
でんき	137					のこぎり	63

英 (122)	件 (104)	良 (81)	蚕 (73)	績 (68)	疑 (59)	句 (50)	燈 (34)	開 (23)	季 (5)
術 (122)	格 (105)	関 (82)	乗 (76)	専 (68)	招 (60)	始 (51)	想 (35)	任 (26)	快 (6)
院 (122)	実 (105)	末 (82)	布 (76)	精 (69)	京 (60)	半 (52)	成 (36)	討 (27)	群 (9)
業 (126)	際 (105)	馬 (82)	州 (76)	材 (71)	整 (64)	戦 (52)	告 (37)	議 (27)	内 (12)
結 (126)	観 (106)	員 (86)	焼 (78)	画 (71)	備 (64)	容 (56)	漁 (37)	報 (27)	君 (16)
的 (136)	察 (106)	昼 (87)	橋 (78)	順 (71)	反 (65)	易 (56)	線 (42)	对 (28)	厚 (17)
興 (138)	径 (111)	付 (88)	島 (79)	序 (71)	省 (65)	録 (57)	機 (43)	建 (31)	移 (18)
燃 (141)	確 (111)	置 (94)	築 (80)	係 (73)	往 (65)	選 (57)	像 (43)	都 (31)	根 (19)
有 (143)	筆 (117)	初 (101)	械 (80)	造 (73)	復 (65)	競 (58)	劳 (44)	館 (32)	積 (19)
包 (120)	歴 (103)	設 (80)	速 (73)	限 (68)	争 (58)	豊 (45)	公 (32)	緑 (19)	
職 (122)	史 (103)	改 (81)	利 (73)	最 (68)	昭 (58)	満 (48)	破 (33)	達 (20)	

漢字

よばよば	よもぎ	よめな	よどみ	よしむら	よしのやま	ようさん	ようい	ゆりかご	ゆたか	ゆきづまり	ゆうしょう	ゆうぎ	やまもとせんせい	やまもとぎゆうほう	ヤコブセン	やきゆう	
103	11	11	59	90	57	106	56	114	6	38	53	131	27	26	24	68	90
わりあい	わくわく	わかやま	わか		ロサンゼルス	ろうそく		れんらく	れんしゅう	れきし	りょうほう	りそう	ランプ	ランドセル	らくだい	ヨーロッパ	ヨーロッパ
136	20	57	47		66	141		52	28	103	73	35	136	92	77		127



Copyright 1950, by
The Gakkō Toshō Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国 519

国語五年生 上

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

太陽の下に……………	山村 暮鳥氏
麦……………	千家 元麿氏
第一の花……………	島崎 藤村氏
三光鳥をきく……………	直良 信夫氏
新しい力……………	吉野源三郎氏
「日記のたより」の一部……………	金子 薫園氏
かがやかしい記録……………	広瀬 謙三氏
クラーモント号の……………	豊沢 豊雄氏
時……………	栗原 一登氏
蚤のまゆ……………	高桑 敏夫氏
少年のころ……………	ナサニエル・ ホーソン 作 窪田啓二氏 訳

感謝のことは
左記の作品を本書に掲載させていた
だきましたことについて、著作者の方
々にあつく感謝いたします。
なお、規則や指示にしたがって多少
加除訂正のやむをえなかったことにつ
いて、御諒承をお願いいたします。

編者	廣島市東千田町 廣島高等師範学校教諭 今石光美
表紙	田原輝夫 さしえ 高橋正人
昭和二十五年	月 日 印刷
昭和二十五年	月 日 発行
著作者	廣島市東千田町廣島高等師範小学校内 財団法人 学校図書研究会 会長 森岡文策
発行者	東京都港区芝三田豊岡町八番地 学校図書株式会社 代表者 川口芳太郎
印刷者	東京都港区芝三田豊岡町八番地 印刷株式会社 代表者 川口芳太郎
発行所	東京都港区芝三田豊岡町八番地 学校図書株式会社
定価	円

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びに
これに類する一切のもの無断發行を禁ずる

国語五年生上の編修について

一、本書は教育基本法、学校教育法、学習指導要領（国語科篇）、検定基準などの趣旨を具体的に表わすことにとめた。広く新教育運動の研究やアメリカの教科書なども考慮し、如何なるカリキュラムにも応じ得る幅を持った単元学習をとっている。児童の生活単元ともいふべきものを縦軸とし国語学習の基礎的体系を横軸とする座標に国語の学習単元を設定したところに本書の独特なねらいがある。

二、五年生用は上下二冊とし、上は四月から十月まで、下は十一月から三月までに使用するように構成されている。

三、本書は五単元から成っている。「新しい力」では、もり上がる生命の力を主題として、それを感じとつていくところに、あらゆる活動が展開されることをねらいとしている。表現形式の上からは、詩、叙景文、抒情文を配し、さまざまな国語活動を計っている。「心と心」ではわれわれの社会が精神に結ばれ、機能的

に結ばれている実体を、手紙や、記録や報告や日記の形で表現し、いろいろな社会生活を理解していくことをねらいとしている。「スポーツ」では本期の児童の興味を中心とし、スポーツの中に流れているいわゆるスポーツマンシップを味わい、それが如何に人間生活を明かると、ゆたかにしているかを表現の面から理解していくのである。「発表会」では夏休み中の研究作品を中心として、発表会の運営の仕方を研究していくと同時に、ここにあげられた作品を手がかりとして、いろいろなものを理解していくことをめあてとしている。

「少年のころ」では、すぐれた人々の少年時代を興味の中に理解すると共に、伝記の読み方、伝記を読むことの意味を理解させたい。

四、本書の新出語いは総数三八七語である。漢字は一〇八字で学習負担の軽減をはかっている。

五、巻末に語い表とお仕事の手びきをのせて本書の学習と指導を便ならしめている。お仕事の手びきは特に重要な意味を持つものである。

広島大学図書

0130449662

